
特集・森からみたアジア・アフリカ

コンゴ盆地北西部に暮らすバカ・ピグミーの生活と
長期狩猟採集行（モロンゴ）

— 熱帯雨林における狩猟採集生活の可能性を示す事例として —

安 岡 宏 和*

Long-term Foraging Expedition and Subsistence of the Baka
in Northwestern Congo Basin:
An Example of Pure Foraging Life in Tropical Rain Forests

YASUOKA Hirokazu*

While “Pygmy” hunter-gatherers were generally assumed to be the original inhabitants of the central African rain forest, recent studies have proposed the hypothesis that it is impossible to subsist by hunting and gathering alone in the tropical rain forests without some degree of dependence on agricultural products. This hypothesis has been debated among researchers of hunter-gatherer societies in different parts of the world. There have been, however, few studies on this issue that were based on sound data on the actual hunting and gathering life of the forest peoples.

This paper examines the possibility of hunting and gathering life in the tropical rain forest, based on the data obtained from participant observation on *molongo*, a long-term hunting and gathering expedition, among the Baka in southeastern Cameroon. During the two and a half months of the expedition, the Baka subsisted solely on wild food resources, wild yams in particular, although it was during the dry season when food resources are generally thought to be scarce. The sustainability of such a forest life is examined in relation to the abundance and distribution patterns of wild food resources, hunting and gathering technologies, residential patterns and nomadic life style.

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

2004 年 4 月 14 日受付, 2004 年 7 月 26 日受理

1. 序

1.1 問題の所在

「森の民」[Turnbull 1965] としても知られる「ピグミー」系の人々は、アフリカ中央部のコンゴ盆地一帯に広がる熱帯雨林に暮らしている。コンゴ盆地東部のムブティやコンゴ盆地北部のアカなどについておこなわれてきたさまざまな研究 [Turnbull 1965; 市川 1982; Bahuchet 1993a; 寺嶋 1997] において、「ピグミー」の諸集団が近隣農耕民との間に密接な関係を築いて生活していることが報告されているが、同時にそれらの研究において、「ピグミー」は熱帯雨林の先住民であり、農耕民が焼畑農耕とともに進入してくる以前には森のなかで独立して遊動的な狩猟採集生活を営んでいたとされてきた。

ところが、「ピグミー」をはじめとする世界各地に現存する狩猟採集社会に関する研究に対して、1980 年代から「見直し派」(revisionists) とよばれる研究者によって、盛んに議論がかけられるようになった。それは、従来の狩猟採集社会の研究が「旧石器時代の生活様式」あるいは「人類進化の痕跡」といったステレオタイプ化を生みだしたとして、研究者が無批判的に想定してきた「狩猟採集民」の真正性を批判したものであった。すなわち現代の狩猟採集社会は、同時代のマクロシステムにおける権力関係のなかで圧迫され、周辺化された結果として形成されたものであって、その意味で現代の産物であるというのである。

このような狩猟採集社会に関する批判的検討の潮流のなかで、Headland [1987] や Bailey ら [1989] は、熱帯雨林での狩猟採集生活の可能性そのものに疑問を呈した。熱帯雨林には多様な生物が生息しており生命の宝庫ともいわれるが、実は人間が手に入れられる食物は少なく、とくにカロリー源が不足するのではないかと。したがって、農作物を利用せずに狩猟採集の産物のみに依存した生活はきわめて困難であり、「ピグミー」など熱帯雨林の狩猟採集民とされている人々は、焼畑農耕をおこなう人々との共生関係なくして熱帯雨林地域に進入することはできなかったのではないかと、というわけである。

この指摘は生態学的な観点によるものであるが、「ピグミー」らの社会的および文化的な側面に関しても重大な意味をもっている。つまり、農耕民との共生関係ないし農作物を入手することが「ピグミー」の生存上の必要性に起因し、それなしには熱帯雨林のなかでは生きることさえ不可能であるならば、彼らの社会的ないし文化的な種々の特徴を「森の民」あるいは狩猟採集民的な性格を示すものとして解釈してきたこれまでの研究成果は再検討を迫られることになるのである。

本稿では、熱帯雨林とそこに住む人々に関するこのような問題をふまえながら、「ピグミー」と総称される人々の 1 つであるバカの狩猟採集活動を詳細に記述し、ついで定住集落から数十 km も離れた地域でおこなわれる長期狩猟採集行を分析することによって、熱帯雨林におけ

る狩猟採集生活の可能性を検証する。このモロンゴ (*molongo*) とよばれる長期狩猟採集行の事例は、人間生活にとって熱帯雨林がもつ潜在力、とりわけそこにおける狩猟採集生活の可能性に関する議論に新たな展開を促すものとなるであろう。

1.2 バカの狩猟採集活動に関する先行研究と本稿の意義

バカはコンゴ盆地北西部のカメルーン、コンゴ、ガボンの国境周辺に分布している。人口は、もっとも多く分布しているカメルーンにおいて、およそ 2 万 5,000 人と推定されている [Joiris 1998]。1950 年代からフランス委任統治政府によって、また 1961 年の独立後にはカメルーン政府によって、バカの定住化がすすめられたため、現在ではほとんどのバカの集団が農耕民の村落の近くに半定住的な集落をつくって生活している [Joiris 1998]。彼らはまた、同じ地域に住むジム、コナベンベ、ボマン、バクウェレ、バンガンドウなどの焼畑農耕民との間に物資やサービスの交換をとおして密接な関係を形成している。定住化と同時に農耕化がすすんだこともあり、食物を農作物に依存する割合も高く [Kitanishi 2003; 服部 2004]、他の「ピグミー」系集団であるムブティやアカと比較すると、バカは定住化・農耕化の傾向が強いとされている [佐藤 1991]。狩猟方法をみても、ムブティ [Harako 1976; 市川 1982] やアカ [竹内 1995; Kitanishi 1995] のように集団的な網猟や弓矢猟はおこなわず、農耕活動との複合や定住的な生活に適しているとされる罾猟 [Takeda 1996] や、農耕民から銃の貸与を受けておこなわれる銃猟が主要な猟法となっている [佐藤 1991; 林 2000]。

このように、バカの社会はすでに「ポスト狩猟採集社会」の様相を呈しているといえる。しかし、そうはいっても、現在でもバカは 1 年のうち何ヵ月かは森のなかで狩猟と採集に強く依存した生活をおくっている。それにもかかわらず、これまでバカの生活そのものに焦点をあてた研究はほとんどなされていない。多少とも生業活動に触れている研究 [佐藤 1991; 林 2000; Leclerc 2001; Kitanishi 2003; 服部 2004] においても、バカの狩猟採集活動に関する記述は不十分であるといわざるを得ない。そこで本稿ではまず、狩猟採集活動を中心にバカの生活に関する記載をおこなう。これは同時に、バカの生活におけるモロンゴの位置づけを明確にしておく作業でもある。

ついで、モロンゴとよばれる長期狩猟採集行を詳細に記述する。2002 年に実施されたモロンゴでは、調査集落に住むバカの大部分をしめる 19 世帯 89 人が定住集落から数十 km も離れた森のなかに移動し、2ヵ月半にわたって狩猟採集のみに依存した生活がつづけられた。このような長期間にわたって実施される多人数の集団からなる狩猟採集生活については、バカをはじめとするコンゴ盆地に住む他の「ピグミー」系集団はもちろんのこと、東南アジアやアマゾンの熱帯雨林に住む人々についても、その実態は記載されておらず、この事例は熱帯雨林における狩猟採集生活に関する貴重な資料を提供することになる。

さて、このモロンゴは以下の 2 点において興味深い。第 1 に、期間中にキャンプで消費さ

れた食物がすべて狩猟採集によって得た産物であったことである。なぜ彼らは、定住化・農耕化によって可能となった安定した食料基盤を、一時的にせよ、あえて放棄して森に入るのか。少なくとも、森のなかにはこれだけの人数を長期間にわたって支えるだけの豊かな食物が存在すると考えてよいだろう。次節で詳述するように、カロリー源となる食物が不足することを根拠に否定的な見解が示されているが、全期間にわたってモロンゴに同行して得られた詳細な資料をもとに、人間生活の場としての熱帯雨林の豊かさを示すことが、本稿の主となる目的である。

第 2 に、一見すると伝統的な狩猟採集生活の側面を多分に残しているようにみえるモロンゴにおいて、罾猟という農耕民的な狩猟法が多用されているのはなぜかという問題である。モロンゴの集団サイズが、それ以外の時期における森のキャンプにはみられないほどに大きいことも、この疑問を増幅する。罾猟は単独または少人数で猟をおこなうことができ、実際に、モロンゴが実施されるとき以外には、せいぜい数家族単位からなる小グループで罾猟がおこなわれる。しかも罾猟のおもな獲物である森林棲アンテロープ類 (*Cephalophus* spp.) は群れをつくらず、森のなかにまんべんなく分布しているため、数人あるいは家族ごとにわかれて、別々の地域で猟をした方が効率的かつ持続的であると予想される。それにもかかわらず、モロンゴにおいて罾猟が主な猟法として採用されているのはどうしてなのか。そこで、バカと他の「ピグミー」の狩猟法を比較しながら、それぞれが暮らす地域の生態環境と猟法の適合性を検討することによって、モロンゴのような大規模なキャンプにおいても罾猟が採用されている要因と、その持続性を検証する。これは、熱帯雨林における狩猟採集生活を考えるとき、カロリー源だけでなく、タンパク源となる食物資源に関しても検討しておくことが必要であると考えからである。

1.3 熱帯雨林における狩猟採集生活の可能性に関する議論

上述したように、本稿で示すモロンゴの事例は、熱帯雨林における狩猟採集生活の可能性に関する議論において重要な意味をもっている。そこで本論にはいる前に、Headland [1987] や Bailey ら [1989] が呈した熱帯雨林¹⁾での狩猟採集生活の可能性に対する疑義と、それに関連して展開された議論をまとめておく。

Headland らは、以下に示す論拠から、熱帯雨林において焼畑農耕がはじまる以前には人々は狩猟採集生活を営んでいたという、暗黙の前提の真偽を検証しなおす必要があることを指摘した。

【カロリー源となる食物の不足】

熱帯雨林では、生物多様性およびバイオマスはきわめて高水準であるが、バイオマスのほとんどは人間の食用にはならない樹木の木質であるし、また栄養価の高い果実やイモ類は林

冠や地中深くにあるため、人間が利用できる食物資源はかえって限られている。

なかでも、人間生活の制限要因となるものはカロリー源である。熱帯雨林におけるカロリー源は、野生ヤマ、果実・種子、蜂蜜、食用昆虫、動物の脂肪などであるが、それらは季節変異が大きい。とくに、果実の季節が終わったあとの乾季には、利用できるカロリー源食物が極端に減少する。

乾季の主要なカロリー源として、唯一考えられるのは野生ヤマであるが、詳細な調査はおこなわれていないものの、より乾燥した地域にくらべると熱帯雨林に生育する野生ヤマの生産量はかなり少ないと考えられている。したがって、少なくとも乾季の間の数ヵ月間は、狩猟採集の産物のみによってカロリーをまかなうことはできないと考えられる。ちなみに Headland [1987] は、熱帯雨林における狩猟採集生活の可能性を検証するとき、野生ヤマが鍵となる食物資源であるとして、自身の問題提起を、“Wild Yam Question” とよんだ。

【熱帯雨林における狩猟採集生活の可能性を示す証拠の欠如】

熱帯雨林において、狩猟採集の産物のみに依存した生活が可能であることを直接的に示す民族誌的資料ないし考古学的資料がない。反対に、現代の「狩猟採集民」はほとんどすべて、近隣農耕民との食物交換や商人との取引によってカロリー源食物を得ていること、その結果、食生活において農作物が大きなウエイトを占めていることは、多くの報告が明らかにしている。

したがって、熱帯雨林の狩猟採集民は、比較的新しい時代になって狩猟採集生活から定住化・農耕化へと移行してきたのではなく、狩猟採集民と農耕民は互いに手を携えて熱帯雨林地帯に入ってきたのではないかと、そもそも熱帯雨林においては、農作物を利用せずに狩猟採集のみによって生活することは不可能なのではないかと [Headland 1987; Bailey *et al.* 1989]、というわけである。

この「熱帯雨林では狩猟採集のみに依存した生活は不可能である」とする仮説に対して、

-
- 1) 熱帯雨林における狩猟採集活動の可能性に関する議論において対象となる森林であるが、Headland [1987] は年間降水量 4,000mm 以上の地域にある常緑林であるとしている。ところが、調査地域はもとよりコンゴ盆地の森林の大部分は年間降水量が 4,000mm に満たない [門村 1992]。一方、Bailey ら [1989] は、よりゆるやかに、南北回帰線の間にあって最低気温が氷点下にならず、年間降水量が 1,000mm 以上の地域にある常緑林および半落葉性樹林であるとしている。一般的に熱帯雨林とよばれる森林は、最寒月の平均気温が 18℃を下回らない地域に分布しており、乾季のない多雨林と規則的に数ヵ月の乾季（降水量が 60mm/月以下）がある季節に区分されるが、この 2 つの境界を突きとめることは難しく、両者を包括して熱帯湿潤林 (tropical moist forest) とされることがある [Sommer 1976]。この熱帯湿潤林は、Bailey らが対象とする森林とほぼ一致しており、調査地域やコンゴ盆地一帯に広がる森林もこれに含まれる。本稿の趣旨は、熱帯雨林（熱帯湿潤林）の多様性を前提としながら、人間の生活環境としてのアフリカ熱帯雨林の豊かさを検証することであるので、本稿における熱帯雨林の定義は、Bailey らや Sommer による熱帯雨林（熱帯湿潤林）にならうこととする。

Human Ecology 誌において特集が組まれ、反論が展開された [Bahuchet *et al.* 1991; Brosius 1991; Dwyer and Minnegal 1991; Endicott and Bellwood 1991; Stearman 1991]. 寄稿者は共通して、以下のような、この仮説の概念的な不備に対する批判をおこなった。

【熱帯雨林の多様性】

熱帯雨林内部における植生の多様性を軽視している。熱帯雨林においては、ある区画内の植生が多様だというだけでなく、同じようにみえる熱帯雨林における他の区画との間の変異も大きい。このような植生のモザイクとして熱帯雨林を考えるべきであり、少数の区画の調査結果から熱帯雨林全体について論じてはいけない。

【人間生活による植生改変】

人間が生活することによる植生改変効果を考慮していない。原始的な熱帯雨林には食物が少ないというが、熱帯雨林は野生ヤムが育ちにくいとされる極相林にすべて覆われているわけでは決してなく、日光が差し込むような攪乱された場所がいたるところに存在している。このような植生のモザイクは焼畑農耕だけでなく、狩猟採集生活によってもつくられてきた可能性がある。

【狩猟採集民の資源獲得能力】

狩猟採集民の、資源獲得のための身体的能力や技能、知識を過小評価している。現在の狩猟採集民は食生活のかなりの部分を農作物に依存しており、彼らが熱帯雨林から得ている限られた食物資源のみによって、熱帯雨林の潜在的な生活支持力の限界を論じるのは間違いである。

【現在と過去の区別】

熱帯雨林において狩猟採集のみに依存した生活が実際に可能かどうかという生態学的 (ecological) な議論と、はじめて熱帯雨林に暮らしはじめた人々が狩猟採集のみに依存していたのかどうかという進化論的 (evolutionary) な議論を区別しておく必要がある。現在、熱帯雨林で狩猟採集のみに依存した事例がみられないことは、過去においても狩猟採集生活が不可能であったことの説明にはならない。

【考古学的証拠の欠如】

遺跡や遺物が残りにくい熱帯雨林において考古学的な資料がないことは、この仮説に対して中立である。

これらの批判はどれももっともなものであり、これらの指摘によって熱帯雨林における狩猟採集生活の可能性を再検討する方向性は示されたものの、Headland [1987] や Bailey ら [1989] が主張する仮説に対する反論とはなりえていない。この議論を実りあるものにする

ために必要なことは、物語の前提を崩すことがもっぱらの目的であるような「ポストモダンのレトリック」[Headland 1997]ではなく、実態調査から得られた資料に基づく議論である[Bailey and Headland 1991].

しかしながら、民族誌的な資料に基づく反論は、大部分が「逸話的」[Bailey and Headland 1991]なものであった。熱帯雨林における狩猟採集生活の可能性を示す直接的な資料として、この特集で提示されているのも次の2例である。

【マレー半島に住むバテク】[Endicott and Bellwood 1991]

89人の集団の、連続していない93日間に観察された食事において、15種、計2,067kgの野生ヤマが採集され、食べられた。それは重量にして食生活全体の77%、カロリーにして54%を占めていた。

【コンゴ盆地のアカ】[Bahuchet *et al.* 1991]

1.24haというきわめて小さな区画による調査ではあるが、コンゴ盆地西部においては1haあたり2kgの野生ヤマの収穫が期待できる[Hladik *et al.* 1984]。アカの集団の平均人数(26人)や、遊動域の広さ(250km²)を考慮すれば、野生ヤマは狩猟採集生活の基盤となりうる食物だと考えられる。

前者は、食生活における野生ヤマの重要性を示してはいるものの、狩猟採集のみに依存した生活の可能性を肯定もできるし、否定もできる資料である。また後者は、野生ヤマの分布に関する資料であるが、調査区画が小さい点と、実際にそれに依存した生活の実態が描かれていない点で不十分である。ともあれ、多くの研究において暗黙の前提とされてきたにもかかわらず、かつて熱帯雨林に住む人々は独立して狩猟採集生活を営んでいたということを直接的に示唆する資料は、この2例しかなかったのである。

その後のいくつかの「ピグミー」に関する生態人類学ないし生態学的な研究[Kitanishi 1995; Sato 2001]や、コンゴ盆地東部の考古学的な研究[Mercader *et al.* 2000]において、この仮説に関する言及がみられるものの、「熱帯雨林では狩猟採集のみに依存した生活は不可能である」というHeadlandらの仮説を十分な資料に基づいて検証し、議論を前進させるような研究はまだなされていない。

2. 調査地と方法

2.1 調査地域の概況

カメルーン東南部には、たがい150kmほど隔てて、アボンバンーンゴイラ間とヨカドゥマームルンドゥ間を南北にはする2本の主要道路があり、その道路にそって町や村が点在し

う 2 つの国立公園として保護する計画が進行しており、すでに公園区画の設定や周辺地域の利用規制を含めたゾーニングが終わっている。国立公園の運営が本格的に開始され、獣肉の交易や狩猟活動が厳しく取り締まられるようになると、バカの生活に影響が生じることは避けられない [服部 2004]。

2003 年 8 月現在、調査村に住んでいるバカは 35 世帯約 140 人である。バカの人口は平均的な集落では 50 人程度とされていることから [Sato 1992; Tsuru 1998]、調査村のバカ集落の規模はかなり大きいといえる。

調査村に住んでいる農耕民コナベンベの村長によれば、村の名「ズーラボット」とは、彼らの言葉で「人々の足跡」のことで、転じて「人が集う場所」という意味だという。また、「アンシアン」とはフランス語で「旧」という意味である。第一次世界大戦時に、当時の宗主国であったドイツと現コンゴ共和国方面から侵攻してきたフランスが戦ったとき、コンゴとの国境を流れるジャー (Dja) 川流域に住んでいた祖先が北方へ移動した。そして、現在の村から 5km ほど南方にあるレベ (Lebe) 河畔に村をつくり、その後、ヨカドゥマ方面へ移住しながら新しい村をつくっていったのだという。

このようにズーラボット・アンシアン村は、コナベンベがこの地域に移住してきた際に 1 つの拠点となった村であるが、1964 年に 152 人を数えたコナベンベの人口 [Cameroon 1966] は、現在では 2 世帯 11 人にまで減少している。1970 年ころには、すでに村から 40km 離れたグリビ村まで道路が達していたというが、ブンバ (Boumba) 川を渡す浮き橋 (bac [仏]) がよく故障したために車の往来は少なく、交通の便はきわめて悪かった。²⁾ そのため 1970 年代の半ばごろ、ズーラボット・アンシアン村に住んでいたコナベンベの多くが、ブンバ川の東側にあるズーラボット・ヌボー (新ズーラボット) 村などに移住した。それ以降、ズーラボット・アンシアン村ではカカオなどの換金作物の栽培をおこなっておらず、農作業のための労働力の提供などをおとしたバカと農耕民との経済的な関係は、他地域に比べてずっと薄い。

2.2 調査期間と方法

本稿で利用する資料は、2001 年 8 月から 2002 年 9 月と 2003 年 1 月から 8 月の、計 21 ヶ月の現地調査から得た。とくに 2002 年 2 月から 4 月の 2 ヶ月半の間におこなわれた長期狩猟

2) 2001 年にはベック (Bek) 川東岸のマレア・アンシアン村まで伐採道路が開通し、モロンゴが実施されていた最中の 2002 年 4 月に、ベック川を越えて調査村および最奥のガトー・アンシアン村まで道路が開通した。道路開通後、日用雑貨の行商や獣肉の交易、狩猟などをおこなうために、村外からやってきた人々が常時 10~20 人くらい村に滞在するようになった。それらの多くは道路開通後にやってきた人々である。狩猟のためにきた人々は、ズーラボット・ヌボー村やその周辺の村からきたコナベンベが多いが、行商や獣肉の交易をおこなっている人々は、この地域の中心的な町であるヨカドゥマや、さらに遠方のパトゥリ、アボンバンなどの町からきた人が多く、なかにはカメルーン西部の旧英領圏出身の人もいる。

採集行（モロンゴ）に全期間をとおして同行して得た資料が本稿の中核をなしている。

モロンゴでは、3月5日から4月23日までの50日間に、キャンプにもちかえられたすべての動物、野生ヤム等の野生植物などの名前を記録して重量を計った。なお狩猟の成果については、モロンゴの全期間にあたる2月13日から4月27日の間に捕らえた獲物も記録した。食生活における消費人数は、12歳以上の人を1人、2歳から12歳の子供を0.5人、2歳未満の乳児を0人として算出した（Ichikawa [1983], Kitanishi [1995] を参照）。哺乳動物の同定には Kingdon [1997] を用いた。植物の同定については、さく葉標本を作成してカメルーンの国立植物標本館（Herbier National）に依頼した。なお野生ヤムのラテン名は Dounias [1993] を参照した。

モロンゴのキャンプ地や、はね罾猟のルートなどの位置情報は、Garmin 社製 e-treck を用いて測定した。河川名は GPS 情報とカメルーン政府の Centre Geographique National が発行する 20 万分の 1 地形図を用いて確認した。調査地のバカが過去におこなったことのあるモロンゴの場所については、10 歳以上の男女 87 人に対してインタビューをおこなって、河川名をあげながら逐一確認した。なおバカは原則として河川と対応させながら森のなかの位置関係を認識している。

モロンゴ以外の時期についての居住集団と移動生活の実態を明らかにするために、世帯の滞在場所を毎日記録した。バカの世帯単位は、原則として夫婦とその未婚の子供からなる核家族である。世帯の滞在場所については夫が寝た場所を用いた。調査者が村を離れていた日については帰村後ただちに確認した。2002 年 10 月から 12 月の間は日本に帰国していたため 2003 年 1 月に聞き取り調査をおこなった。

通常のはね罾猟キャンプにおける狩猟の成果については、森のキャンプ地 5 ヶ所と村の近くのキャンプ地 1 ヶ所について、はね罾猟をはじめてから 2~3 ヶ月経過したあと、罾を仕掛けたバカの男たちと一緒に罾を回って各罾においてそれまでに捕獲した獲物を記録した。バカは各々のはね罾で捕らえた獲物の種類と数を鮮明に記憶しているので、調査の精度には問題がない。

食事の品目調査に関しては、はね罾猟キャンプでは調査者が食料をもっていかなかった 2 回の訪問合計 16 日間について、大型動物の狩猟キャンプ（銃猟）では調査者が同行した 3 回合計 38 日間について、また定住集落では 2003 年 8 月の 10 日間についておこなった。なお食事回数は朝、夕をそれぞれ 1 回とし、昼の間に食べられたものは数回に分けられていた場合でも 1 回とした（たとえば蜂蜜などは採集場所で食べられたあとキャンプにもちかえってからも食べられるが、これをあわせて 1 回とした）。なお、モロンゴ期間中については狩猟採集産物を質・量ともにもれなく記録しており、これをもとに摂取カロリーを計算した。カロリーの算出には Leung [1968] を参照した。

3. バカ・ピグミーの生活

3.1 生活様式の概略

モロンゴというバカ語の語彙については、ズーラボット・アンシアンから北西に 50km ほど離れたロミエ地域で調査をおこなった Leclerc [2001] が、バカの狩猟活動に関する項で記述している。彼は、バカの狩猟活動は、猟法ではなく、参加人数や期間をもとにして分類されているとして、センド (*sendo*)、ンバサ (*ngbasa*)、マカ (*maka*)、モロンゴという 4 つのタイプに分類されていると述べている。センドは単独もしくは 2~3 人でおこなわれる日帰りの狩猟、ンバサは男性数人による 1 泊の狩猟行、マカは多数の男性からなる狩猟団による遠方への数日から数週間の狩猟行、そしてモロンゴは男性だけでなく女性も同行する長期継続的な狩猟採集活動であるとしている。なお、調査村では、ンバサに相当する狩猟形態も、センドとよばれていた。本稿ではこの用法に従い、ンバサには言及しない。

この分類は、参加人数と参加者の構成、活動期間などを基準にしているが、バカの狩猟生活の実態は必ずしもこのようにはっきりとしたタイプに分けられるものではない。たとえばモロンゴの期間中にカワイノシシの足跡をみつければ、即座に数人でセンドに出かけるのである。狩猟行為そのものであるセンドと、あらゆる狩猟採集活動の複合体としての生活様式であるモロンゴを、狩猟活動に関する同レベルの概念であると考えerるには無理がある。そこで、ここでは Leclerc によるモロンゴの語彙の説明を踏襲したうえで、しかしモロンゴを単なる狩猟活動の 1 タイプではなく、バカの生活を構成する生活様式の 1 つと考えたい。モロンゴのほかには、はね罾猟キャンプ (*bala a waiya*) での生活、定住集落 (*gba*) での生活がある。これらの生活様式は、定住集落からの距離と、それに依存する食料獲得方法を基準にして分類できる。

モロンゴは、定住集落から遠い場所 (20~50km) にキャンプをつくり、かなり長期間にわたって、ほとんどすべての食物を狩猟採集に依存する生活をおこなう。また 10 世帯を越える大規模なキャンプをつくることが多い。一見したところモロンゴはもっとも「始原的な狩猟採集民」を彷彿とさせる生活様式といえる。

はね罾猟キャンプは、定住集落から比較的近い場所 (10~20km) に設けられるため、野生ヤムなどの採集物とならんで、自家栽培されるプランテンや、購入されるキャッサバ粉や米も消費される。獣肉とそれらの食物との交易をある程度前提として狩猟がおこなわれること、モロンゴと比較してキャンプの規模が小さいこと、などに特徴がある。

定住集落では、生業活動のうち農作業に最も多くの時間が費やされ、食物のほとんどを農作物に依存している。農耕民が多く住んでいる他の村のバカは、畑仕事の手伝いなどをおこなって食物を得ることもあるようだが [服部 2004]、調査村ではまれである。

ところで、調査村では、マカとよばれる狩猟が頻繁に実施される。マカに参加するのは男

性のみであり、その間、女性は定住集落で生活している。マカによって得られる利益（肉や現金）は、調査村に住むバカの生活において大きな位置を占めているため、参加するのは男性のみであるにもかかわらず、バカの生活を理解するためには重要であると考えられる。マカは、モロンゴの最中や、はね罾猟キャンプを拠点にしておこなうこともありうるが、現在調査村でおこなわれるマカは、ライフル銃の所有者などによる狩猟の依頼を契機として、定住集落において狩猟団が編成されるものがほとんどであった。

図 2 に、モロンゴに参加していた世帯、はね罾猟キャンプに滞在していた世帯、定住集落に滞在していた世帯、夫がマカに参加していた世帯、および隣村などを短期間（不在が 1ヵ月を越える世帯は除外した）訪問した世帯の割合の月別変化を示した。モロンゴは 2002 年の 2 月から 4 月にかけておこなわれ、大半の世帯がこれに参加している。はね罾猟キャンプの生活は年間をととして実施されており、各月とも全世帯の 20%から 50%がこれに従事してい

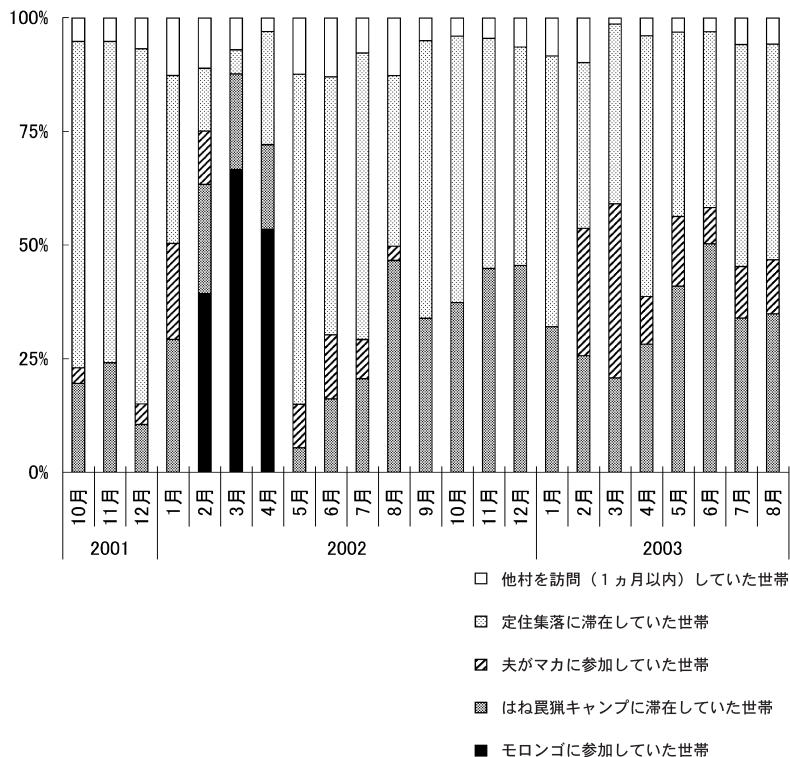


図 2 各生活様式に従事する世帯の割合（2001 年 10 月～2003 年 8 月）

100%は 578～1024 [世帯数 (1ヵ月を越える他村での滞在世帯は除外している) × 観察日数]。バカは夫婦と未婚の子供からなる世帯を単位として生活しており、原則として、世帯の構成員は同じ場所に滞在するが、マカの場合は女性や幼い子供は定住集落に滞在する。この期間にマカは 38 回おこなわれ、はね罾猟キャンプはのべ 45ヵ所につくられたが、モロンゴが実施されたのは 1 回のみであった。

る。定住集落に滞在している世帯は、モロンゴがおこなわれていた間には 5%程度と極端に少なく、その前後で 70%を越える高水準になっているが、それ以外の時期では 40%から 60%の間を推移している。マカは主に 1 月から 8 月の間におこなわれており、その時期には 10%から 40%の世帯の男性が参加している。調査期間をとおしたのべ従事日数は、定住集落 (49%) とはね罾猟キャンプ (29%) がとくに多く、マカ (9%) とモロンゴ (7%) がこれに続く。この結果から、調査村のバカの年間にわたる生活サイクルは、定住集落とはね罾猟キャンプでの生活が主体であり、機会をみてマカやモロンゴがおこなわれていることがわかる。

ところで、このグラフに反映されているはね罾猟キャンプはのべ 45カ所につくられ、マカは 38 回おこなわれたのに対し、モロンゴは同じ期間に 1 回しかおこなわれなかった。しかしモロンゴでは他のキャンプにはみられないような大人数のキャンプが形成される。モロンゴは頻度こそ低いものの、その規模が大きいことに特徴がある。世界各地の狩猟採集民の集団サイズは 50~100 人の範囲に収まるとされているが、定住化が進んだバカの社会では森のなかにこのような規模のキャンプが形成されることは少なく、モロンゴが唯一の機会といつてよい。

くわしく述べる前に、それぞれの生活様式において、主におこなわれる生業活動を表 1 にまとめておく。定住集落での生活では農業が盛んにおこなわれ、マカでは銃猟が中心となること、特徴的であるといえる。モロンゴとはね罾猟キャンプでの生活は、ともにはね罾と蜂蜜採集が中心となる生業活動であることでは共通しているが、モロンゴでは野生ヤムの採集に重きをおく点によって両者を区別することができる。

3.2 狩猟

3.2.1 はね罾 (waiya) 猟

鋼鉄製のワイヤーを用いたはね罾は、現在のバカ社会においてもっとも頻繁におこなわれている猟法であり、大型獣の集団猟などで長期間定住集落や森のキャンプを離れるとき以外

表 1 生活様式と主な生業活動

生業活動		生活様式			
		モロンゴ	はね罾 キャンプ	定住集落	(マカ)
狩猟	はね罾	◎	◎	○	
	銃猟 (集団)	○			◎
	槍猟 (集団)	○			○
採集	野生ヤム	◎	○		
	果実		○	○	
	蜂蜜	◎	◎	○	○
漁労		○		○	
農業				◎	

◎：主となる活動，○：しばしばおこなわれる活動

には常におこなわれている。小規模なはね罾は定住集落の周辺でもおこなわれることがあるが、たくさんの罾を仕掛けるときには定住集落から 10～20 km ほど離れた森のキャンプに移動することが多い。モロンゴでの狩猟については後述するので、ここでは主にはね罾キャンプの例について説明する。

村の南方に、森へ入る主要なルートが 2 つあり、さらにその道から枝分かれした数多くのルートがある。はね罾キャンプは、これらのルートに沿った地点に設けられる。調査期間中に設けられたはね罾キャンプの世帯数の平均サイズは 2.4 世帯 (n=45)、10 人程度で、もっとも大きなキャンプは 5 世帯であった。キャンプに着いてから定住集落に帰るまでの平均滞在日数は 58 日（正確な日数がわかった 17 例について）であった。期間が短いときには、キャンプを引き払うときに罾を残したままにしておき、村を生活の拠点にしながらはね罾を続けることも少なくない。

キャンプ地が決まると、まず女性が細い木々を組んでドーム状の枠組みをつくり、そこにクズコン科の葉をかけて屋根を葺く。近くにラフィアヤシがたくさんあれば、その後数日をかけて男性がラフィアヤシの葉を編んで屋根葺きや壁にもちいる薙 (natte [仏]; ebo [バカ語]) をつくり、それを使ってより堅固な方形の小屋を建てる。あとに残ったラフィアヤシの葉軸を用いて、ベッドをつくることもある。キャンプについた翌日からは、1 日に 10 個くらいずつ罾を仕掛けはじめる。2 日くらい続けて罾を仕掛けると次の日は中断して、蜂蜜を探したりする。

はね罾は、獣道にそって 10～30 m おきに仕掛けられることが多いが、集中して 3 つほど仕掛けられたり、わき道に仕掛けられたりすることもある。1 人が 1 つの罾のルートに仕掛けるのは 50～100 個くらいである。ハンターとはね罾の数によって多少の相違はあるが、2～3 世帯からなる典型的なキャンプでは、4 つ前後のはね罾ルートがキャンプから放射状にのびている。2 週間ほどで大部分の手持ちの罾をかけてしまうと、あとは残ったワイヤーを用いて小さなルートを随時継ぎ足したり、獲物がまったくかからないルートを変更したりするなどの微調整をおこなう。罾にかかった動物は、一兩日のうちに死んでしまい、死後 2 日で体中がウジだらけになる。したがってすべての獲物を損なわずに回収するには、少なくとも 3 日に 1 度は罾を見回す必要がある。

はね罾のおもな獲物は、レッドダイカー類（ピーターズダイカー：ngendi; *Cephalophus callipygus*, セスジダイカー：ngbomu; *C. dorsalis*, ハラジロダイカー：mongala/mie; *C. leucogaster*, スグロダイカー：monjumbe; *C. nigrifrons*) や、カワイノシシ (pame; *Potamochoerus porcus*), コシキダイカー (bemba; *C. silvicultor*) などの中型の有蹄類である。ついで多いのが、ブルーダイカー (dengbe; *C. monticola*) やフサオヤマアラシ (mboke; *Atherurus africanus*) などやや小型のものである。まれにアカスイギュウ (mboko; *Syncerus*

caffer) やボンゴ (*mbongo*; *Tragelaphus euryceros*) などの大型有蹄類や、食肉類、霊長類などが罾にかかることもあるが、大きな動物はワイヤーを切ってしまうことが多い。あるときバカによって銃で倒されたボンゴの足には、4 本の切れたワイヤーが絡まっていた。

主要な獲物であるレッドダイカー類は、頭部と内臓が自家消費される。胴体と四肢の部分は、半身に切り分けたあと燻製にして、500~1,000Fcfa (655.957Fcfa=1euro, 固定レート) で売ることが多い。カワイノシンやオオセンザンコウ (*kelepa*; *Smutsia gigantea*) は脂肪分が多いのでとくに好まれ、売らずに全部食べることも少なくない。キャンプでのカロリー源食物としては、野生ヤムなどを随時採集して食べるが、最初に森のキャンプに入るときにポリバケツ 1 杯 (約 10kg) のキャッサバ粉などを商人から前借りして持参する例も何回かあった。また商人が森のキャンプに運んできたキャッサバ粉と、獣肉を交換する例もみられた。このように、はね罾猟キャンプでの食生活においては、交易物資への依存度が高く、その点では、猟法こそ異なるものの獣肉の余剰を農作物と交換しているムブティの網猟のケース [Ichikawa 1991] とよく似た状況にあるといえる。

3.2.2 銃 (*ngali*) 猟

銃猟にはライフル銃 (*karabin*) や散弾銃 (*loli*) が用いられる。現在のバカの間で、銃猟は罾猟について頻繁におこなわれる猟法であるが、ズーラボット・アンシアン村に暮らすバカおよびコナベンベのなかには銃を所有している人はいない。かなり昔のことであるが、あるバカの母親が森のなかでみつけた象牙を売って中古の散弾銃を購入したことがあったというが、その銃はすでに壊れてしまったそうである。

ライフル銃の弾丸は 1 個 12,000Fcfa と高価なので、バカ自身が購入するのはきわめてまれである。また、ライフル銃が使用されるのは、高価な弾丸に見合う獲物、すなわちアフリカ (マルミミ) ゾウ (*ya*; *Loxodonta africana cyclotis*) のような大型獣に対してのみである。弾丸がたしかに使用されたことを確認したり、自らの肉を得るために、銃の所有者がマカに同行することも少なくない。このほか商人がもってきた弾丸をバカに与え、銃を別人から借りて狩猟をおこなった例が 2 例と、ライフルの弾丸を自分で手に入れたバカの男が銃を借りておこなった例が 1 例あった。調査期間中にはみられなかったが、散弾銃から槍を発射させるサラ (*sala*) とよばれる武器でゾウを狙う猟法もある。

数人以上の男性からなる狩猟団が、数日から数週間にわたって遠方へでかける狩猟形態は、マカとよばれるが、ライフル銃で大型獣を狙う狩猟 (*grande chasse* [仏], *big hunting* [英]) は、この形態でおこなわれる。1 回の狩猟に要する期間は 1~2 週間くらいである。狩猟団は数人から 20 数人 (平均 6.9 人うち少年 2.2 人, $n=25$) からなり、銃 (現在ではライフル銃がほとんど) を委託されて獲物を撃つトゥーマ (*tuma*) とよばれる狩人、槍をもって参加する数人の成年男性、そして数人の少年から編成される。槍をもって猟に参加するのは 10 代後半

からであるが、10 歳未満の少年がマカに同行することも多く、少年期から森での生活や狩猟に親しむ機会となっているようである。

バカは森のなかで濡れることを嫌うため、雨の多い季節は概して好まれないが、依頼さえあればいつでもマカをおこなう。2001 年 10 月から 2003 年 8 月の間に 38 回のマカがおこなわれた。原則として、1 つの狩猟団には、大型獣を狙う銃は 1 つであり、例外的に銃をもつトゥーマが 2 人参加した例が 1 度だけあった。

食料は銃の所有者が支給するが、獲物の探索・追跡と並行して蜂蜜採集も頻繁におこなう。調査村のバカは、村の南方のベック川の支流が流れる地域をマカのために頻繁に利用する。このあたりは平坦な台地状になっていて水はけが悪いところが多く、数十アールから数ヘクタールくらいの *bai* とよばれる湿潤性草原が点在しており、そこでは大型の草食獣が塩分を含んだ泥を求めて集まってくる。大きな獲物を仕留めると、狩りに参加していた青年のうちの 1～2 人が女たちをよびに村に戻る。このとき、コセやジェンギなどの精霊 [Tsuru 1998] が登場して女たちをよびにくるという、精霊パフォーマンスがおこなわれることもある。女たちは肉を運ぶために獲物を解体した森のキャンプまでいく。この肉の運搬行はモコフォロ (*mokopolo*) とよばれる。調査地域では、このようなマカが頻繁におこなわれているが、マカを中心とした生活はバカの狩猟民としての技能が外部社会の商業的な動機と強く結合した生活様式であるといえる。

散弾銃を用いた猟も、村にやってきた農耕民がバカに散弾銃を託して依頼するケースが多い。バカの狩猟形態にはマカのほかに、センドとよばれる、単独ないし 2～3 人による日帰りや数日間の狩猟 (*petite chasse* [仏], *small hunting* [英]) がある (なお先行研究 [Leclerc 2001] では、このタイプの狩猟はセンドとンバサに細分されている)。散弾銃による狩猟はほとんどの場合、このセンドとよばれる狩猟形態によって実施される。

散弾銃の主な獲物は、樹上性のオナガサル類 (*kalu*; *Colobus guereza*, *tamba*; *Cercocebus agilis*, *gada*; *Lophocebus albigena*, *koi*; *Cercopithecus nictitans* など) やカワイノシシ、ダイカー類である。カワイノシシなどの場合は銃猟に準じた方法、すなわち静かに獲物に接近して撃つのであるが、ダイカーの場合は鳴声をまねることによって獲物をおびき寄せてから撃つこともある。散弾銃のカートリッジは 500Fcfa とそれほど高くないので、頻繁にはないがバカ自身が購入することもある。オナガザル類を狩るように依頼されたときなどに、ついでに自分の弾を使用することが多いが、銃の所有者が親しい場合には自分の猟のために銃を借りることもある。

3.2.3 槍 (*benga*) 猟

集団的な網猟や弓矢猟をおこなわないバカにとって、鋼鉄製のワイヤーや銃が普及する以前には、中型や小型の獲物を狙った集団槍猟や犬を使った槍猟が中心的な猟法であったと考えら

れる [佐藤 1991]。槍猟の狩猟形態は、マカとしてもおこなわれるし、センドとしてもおこなわれる。現在では、槍のみを用いたマカはきわめてまれであるが、成年男性が多数参加している場合には、大型獣を探索しているあいまに槍猟もさかんにおこなわれ、カワイノシシを仕留めることが多い。また、ほぼ全員の成人男性が槍をもっており、とくに狩猟を目的とせず森を移動しているときや蜂蜜を探しているときにも、獲物の足跡をみつけると、追跡して槍で倒そうとする。

槍猟の主な対象はカワイノシシである。筆者が同行した狩猟で、獲物と遭遇したのが 14 回あった。そのときのハンターの数が 3 人以下であった 4 例はすべて猟に失敗した。ハンターが 4 人以上であった 10 例では、カワイノシシに遭遇した 6 例のうち 5 例は成功し、そのうち 2 例では、1 度に 2 頭を倒した。アカスイギュウに遭遇した 2 例のうち、1 例は成功した。カワイノシシは群れで生活しているのでみつけやすく、また一撃で致命傷を与えることができるため、槍猟にもっとも適した獲物である。はね罌猟でもっとも多く捕らえられるダイカー類の多くは、夜行性であるうえに群れをつくらないのでみつけにくく、槍で倒すことは少ない。アカスイギュウ、ボンゴなど大型の哺乳類も、槍によって倒されることはまれである。フサオヤマアラシやマンガースなどの小型の哺乳類や、オオトカゲ (*bambe*; *Varanus* sp.) やコビトワニ (*mokakele*; *Osteolaemus* sp.), アフリカニシキヘビ (*meke*; *Python* sp.), バイパー (*boma*; *Bitis* sp.) などの爬虫類も、森のなかで遭遇すれば槍でしとめることがある。また犬 (*bolo*) を用いることができれば、吼えることによって獲物の注意をそらしたり、獲物の追跡をおこなったりすることによって槍猟の効率を上げることができる。

Harako [1976] は、ムブティの狩猟活動において、槍猟を特殊な猟法として位置づけている。ムブティは網猟によってダイカーなどの小型の獲物を捕獲し、槍猟の主な対象は中・大型獣である。そして、それらを倒すことができるのは少数の狩りの熟練者のみである。上述したように、網猟をおこなわないバカにとって槍猟はより一般的な猟法として位置づけられるのだが、ムブティと同様に大型獣を倒すことができる特殊な猟法という側面ももっている。ズーラボット・アンシアン村には、ゾウを倒した経験があるハンターは 6 人おり、そのうち 4 人は 10 頭以上のゾウを倒したことがあるが、それらのほとんどは銃を用いて倒したものである。槍でゾウを刺した経験があるという者は少なくないものの、実際にゾウを倒したのは 2 人だけにすぎない。おもしろいことにムブティとバカ、そしてアカにおいても、ゾウ狩りの名人に対してトゥーマという同じ呼称が用いられる。バカ社会におけるトゥーマは必ずしも権威をもつ存在ではなく [Joiris 1998]、近隣の農耕民や象牙商人らに一目置かれているという意味で、むしろバカ社会の外部との関係において意味をもつ存在である。

ゾウを倒したとき、一の槍（ないし銃撃）を与えたハンターはその肉を食べられず、解体にも参加しない。また彼の父系および母系の親族のうち、彼よりも年長の者もその肉を食べられ

ない。このような「狩猟者であること」に起因する食物規制が課せられるのは、ゾウとカワイノシシの場合のみである。カワイノシシの場合は、ある程度の数を倒せば、この規制は解かれる（10 代後半くらいに、食べるかどうかを自分で決断する）が、ゾウの場合は一生の間この規制が厳格に守られる。もしこの規制を破ると、そのハンターは再びゾウやカワイノシシを倒すことができないといわれている。

3.2.4 過去の狩猟方法

現在のバカの猟法において特徴的な点は、ムブティやアカがおこなう集団的な網猟がみられないこと、はね罾猟が中心であること、そして外部者の委託による銃猟が多いことである。それでは過去のバカの猟法はどうだったのだろうか。ここでは、ズーラボット・アンシアン村に暮らす初老のバカの話から、過去の猟法についてまとめておく。彼はこの集落のバカの長 (*kukuma*) であり、またトゥーマでもある。推定年齢は 50～55 歳である。

- 1) 祖父の時代（20 世紀初頭～前半）には、槍のみを用いて狩猟をおこなっていた。
- 2) クロスボウ (*mbano*) は父親が若いころ（20 世紀前半）には使っていたが、現在調査村には 1 個しかなく、クロスボウをつくる人はいない。
- 3) 以前のバカははね罾猟はおこなわず、コナベンベだけがおこなっていたが、彼が幼い頃に（20 世紀半ば）鋼鉄製のワイヤーが手に入るようになり、バカも盛んにはね罾猟をおこなうようになった（ただし、大量のワイヤーが手に入るようになったのは、2002 年に道路が開通して以後のことである）。
- 4) 父親の時代（20 世紀半ば～）には、すでに農耕民や商人らに依頼されてゾウ狩りをおこなっていたが、今ほど頻繁に依頼はなく、また当時は散弾銃に槍をこめて発射するサラとよばれる方法が主であった。息子が生まれた頃（25 年くらい前）からライフル銃が使用されはじめ、現在では主にライフル銃が用いられている。
- 5) その他の猟法では、父親が若いころ（20 世紀前半）には、コナベンベが網 (*yo*) 猟をやっていたという話を聞いたことがあるが、彼自身は網猟をおこなったこともみたこともなく、この地域の他の集落のバカについても網猟をおこなうという話は聞いたことがない。弓矢 (*ndolo*) は子供が遊びのためにつくるが、大人がおこなう猟には用いない。また、コナベンベが落とし穴 (*libei*) をつくっていたのをみたことがあるが、バカは落とし穴をつくらない。

彼の話が、この地域における猟法の変遷の年代をどれほど正確に反映しているのかは今後さらに検討する必要があるが、バカ本来の狩猟は槍猟であると考えられていること、弓矢やクロスボウを用いた狩猟はそれほど盛んではなかったこと、はね罾猟と銃猟は、外部から狩猟具を得ることによって最近になって採用されたこと、網猟や落とし穴、その他の罾猟は農耕民の猟法であると考えられていること、などから猟法の変化についてある程度うかがい知ることがで

きる。

3.3 採集

3.3.1 野生ヤム類

森に滞在しているときには、野生ヤムが重要な食物となる。バカは、蜂蜜や野生ヤム、キノコなどの林産物を探しながら森を歩くことをノア (*noa*) とよぶ。森を歩いているとき、干からびた野生ヤムの落葉をみつけると、すぐに周囲の茂みのなかでヤムの蔓を探しはじめる。蔓をみつけると、山刀 (*ngbala*) や掘り棒などを用いて、食用となる塊根を掘りだす。その際に、蔓が伸びた塊根の基部 (*head*) を地中に残しておく。こうしておくと、翌年ここから新しい蔓がのびて塊根が成長する。このような栽培とも野生状態ともいえないようなヤムに対する働きかけを、Dounias [1993; 2001] は「擬似栽培 (*paracultivation*)」とよんでいる。つまりバカは、ただ惜しみなく与えてくれる存在としての森 (*giving environment* [Bird-David 1990]) に全面的に依存しているわけではなく、かといって農耕活動のように作物との間により積極的な関係を築いているわけでもない。その中間形態としての「擬似栽培」を続けながら、野生ヤムの採集をおこなっているのである。

カメルーンの森林地帯には、15~17 種の野生ヤム (*Dioscorea* spp.) と 2 種のヤムに類似した植物 (*Dioscoreophyllum* spp.) が自生しており [Hladik and Dounias 1993; Dumont *et al.* 1994; Hamon *et al.* 1995], その多様性はアフリカでもっとも高い [Dounias 2001]。そのうち調査地で観察されたものは、ヤマノイモ科のサファ³⁾ (*sapa*; *Dioscorea praehensilis*), エスマ (*esuma*; *D. semperflorens*), バ (*ba*; *D. mangenotiana*), ケケ (*keke*; *D. burkilliana*), クク (*kuku*; *D. minutiflora*), バロコ (*baloko*; *D. smilacifolia*), ンジャカカ (*njakaka*; *D. sp.*), ツヅラフジ科のンビ (*ngbi*; *Dioscoreophyllum cumminsii*) であった。Dounias [1993] はこの他に、食用となるものとして、センデ (*sende*; *D. hirtiflora*), ボリ (*boli*; *D. sp.*), ファンゲ (*pange*; *D. sp.*), ビランゴ (*bilango*; *Dioscoreophyllum sp.*) などが、バカの住む地域に分布しているとしている。

サファとエスマは、一年生の蔓をつけ、比較的開けた環境に自生している。地上部の形態が似ているが、サファは塊根が太く堅くて粘土質の土壌を好むのに対し、エスマの塊根は細く、水分を多く含んでおり脆い砂質の土壌を好む [Dounias 2001]。雨季がはじまると、塊根に貯めておいた養分を用いて蔓を伸ばしはじめる。蔓が林冠に達して光合成をはじめると、ふたたび塊根に栄養分を貯蔵する。塊根が大きく肥大しているこの期間 (11~3 月) が採集に適した時期である。バカによれば、サファとエスマは群生しており、いったんその場所をみつけると近くで大量の収穫が期待できるという。とくにサファにおいてその傾向が強く、1 人の女性が

3) バカ語において p と f で表記されてきた発音は区別されないことが多いが、実際に聞こえる音は f に近いので、カタカナでは「ファ・フィ・フ・フェ・フォ」で表記した。

1 度に 30kg を越えるサファを採集したこともあった。通常ヤムを掘るのは女性の役割であるが、サファが群生しているところでは男性も手伝って掘ることもある。

バは二年生の蔓をつけ、ケケやクク、バロコ、ンジャカカは多年生の蔓をつける [Dounias 2001]。これらは、地表近くにある木質の塊根の基部から地中に伸びてたドンド (*ndondo*; バカ語で亀頭の意 [Dounias 1993]) とよばれる部分が食べられる。ケケやククは単にドンドとよばれることもある。とくにバの基部 (head) は巨大になり、それに覆われた食用部分 (ドンド) を動物による食害から物理的に保護している。バの食用になる部分はかなり大きく生長し、1 個体から 5kg 以上の塊根が採集できることも少なくない。とくに大きいものでは 10kg を越えることもある。これらを採集するときは、木質の基部 (head) を掘り起こして可食部を採集したあと、基部をもとの場所にもどしておく。これらの種は光条件の悪いうっぺいした森のなかにも自生しており、また多年生の蔓をつけるので、必ずしも毎年、塊根に蓄えられた養分が消費されるわけではなく、雨季の間にも食用となる部分がかなり残されている [Dounias 2001; Sato 2001]。これらのヤムが、雨季にも塊根を残して多年生の蔓をつけることについて、Hladik ら [1984] は “waiting phase” の長さを予測できないアフリカの熱帯雨林環境への適応であるとしている。バカによれば、これらのヤムは森のなかに 1 つずつ生えており、サファのように 1 度にたくさんみつけれられるわけではないが、どこの森にいてもみつかることができるという。バやドンド (ケケ・クク) は、サファが少ない季節ないし地域では食生活を支える重要な食物である。

味については、バやエスマは、繊維質が少ないうえに、水分を多く含んで食べやすいこともあり、美味とされている。バロコとンジャカカは味がよくないとされており、実際に採集されることもまれで、妊婦や乳児の両親には忌避の対象となっている。ツヅラフジ科のンビ (*ngbi*) は、少量ずつではあるが美味なため、よくスナックとして食べられる。

3.3.2 果実・種子

果実・種子は、随時採集されて食べられるが、*soko pekie* とよばれる 6 月から 8 月に結実するものが多い。定住集落の周辺でおこなった植生調査 (8ha を対象) では、胸高直径 10cm 以上の樹木が 215 種 (4,088 本) 観察され、そのうち 23 種 (671 本) の果実ないし種子がバカの食用 (薬用を除く) となるものであった [安岡 未発表資料]。それらのうち、実際に採集されて食べられるのを観察したものは、アカテツ科のマベ (*mabe*; *Bailonella toxisperma*)、バンブ (*bambu*; *Gambeya lacourtiana*)、イルヴィンギア科のフェケ (*pekie*; *Irvingia gabonensis*)、ガンゲンディ (ファヨ) (*gangendi/payo*; *Irvingia excelsa*)、コンベレ (*kombele/payo*; *Irvingia robur*)、ソーリア (*solia*; *Irvingia grandifolia*)、ボココ (*bokoko*; *Klainedoxa gabonensis*)、ウルシ科のンゴヨ (*ngoyo*; *Trichoscypha abut*)、ゴング (*gongu*; *Antrocryon klaineum*)、エゴノキ科のギンバ (*gimba*; *Afrostryax lepidophyllus*)、ケクロピア科のンガッタ (*ngata*; *Myrianthus*

arboreus), トウダイグサ科のゴボ (*gobo*; *Ricinodendron heudelotii*), パンダ科のカナ (*kana*; *Panda oleosa*), バンレイシ科のムベ (*mbe*; *Anonidium manii*), ムクロジ科のトコンボリ (*tokomboli*; *Chytranthus atrovioleaceus*) などである。樹木以外の植物では、トウダイグサ科のカソ (*kaso*; *Tetracarpidium conophorum*) の種子, グネツム科のココ (*koko*; *Gnetum* spp.) の葉, ショウガ科のアフリカショウガ (*njii*; *Aframomum* spp.) の果実 (*tondo*) の一種などを食べる。また、村と村をつなぐ道路沿いや森のなかにあるかつての集落跡には、アブラヤシ (*mbila*; *Elaeis guineensis*) が野生化しており、果肉や種子を焙って手軽な朝食やスナックとして食べる。また数十種におよぶキノコ (*tulu*) 類も随時採集する。

このように、多種多様な植物が食用として利用されているが、とくに重要なものはフェケとマベである。フェケやマベの生り年で、たくさんの収穫が期待できるときには、定住集落の周辺やそれらが多く自生している場所にキャンプをつくって盛んに採集をおこなう。これらはともに 6 月下旬から 8 月上旬に結実する。この季節は、とくに *soko pekie* (ブッシュマンゴーの季節) あるいは *soko mabe* (マベの季節) と言及されることから、フェケやマベの重要性をうかがうことができる。ただしこれらは、毎年おなじように結実するわけではなく、年による収穫量の差が著しい。ズーラボット・アンシアン周辺では、2001 年には両者とも豊作であったが、2002 年にはフェケは豊作だったもののマベはほとんど実らず、2003 年にいたってはフェケもマベもまったく収穫されなかった。

フェケは果肉 (*leka*) と種子 (*la*) の両方が食べられるが、主に利用されるのは種子である。フェケが落果する季節になると、女性たちは朝 6 時ころから採集にむかう。1 度に 20~30 kg の果実を採集し、1 日に 2~3 度も採集してくる人がある。集落から近いときは採集したフェケを丸ごと籠 (*gie*) に入れて家まで持ち帰るが、さらに遠くになると森のキャンプに移動して採集を続けることになる。フェケを集めると、まず果実を山刀で 2 つに割って胚乳を取りだす。それを日干しなどで乾燥させて保存する。ある程度の量がたまったところで、強火であぶった後、臼 (*kingili*) でつぶすと油脂分がしみだして、どろどろになる。それが冷めて固まったものを保存しておき、肉などを煮る際に削りとして調味料として利用するのである。果肉は、子供のおやつ程度にしか利用されない。イルヴィンギア科の他の種類の種子も、すりつぶして油脂調味料として使用するが、フェケほど大量の収穫はない。

甘くて大きな果肉をもつマベの果実は好んで食べられる。果肉を食べた後、残った種を日干しにして乾燥させる。ある程度の量がたまると、殻を割って胚乳を取りだして強火であぶってから、臼で挽いてしみだした油 (*mita mabe*) を手で搾り取る。残り滓は再び火にかけ、さらに 1~2 度油を搾り取る。残り滓には有毒物質 (サポニン) が含まれているので食べない。

そのほか、頻繁に食べられるカナは、森のなかに比較的まんべんなく分布しており、また収穫期などの季節変化も少ない。カナの胚乳は空腹時のスナックとして重宝される。誰もがカナ

の樹木がある場所をおぼえており、森を歩いているときにはそこで休憩してカナを食べることが多い。

これらの野生植物のなかには交易の対象となるものもある。フェケは胚乳を乾燥させた状態、マベは種子ないし油の状態で商人に売る。フェケは 2ℓ のボウル 1 杯（1～1.5 kg）で 500 Fcfa、マベの油は 1ℓ が 1,000 Fcfa であった。また、ギンバやアフリカショウガの果実 (*tondo*) も、ボウル 1 杯を 250～500 Fcfa 程度で商人が買取っていく。ときには近くに住む農耕民がこれらの産物とトウモロコシやキャッサバなどの農作物と交換するために訪れることもある。

3.3.3 蜂蜜および無脊椎動物

森のキャンプへ移動するとき、仕掛けたはね罠をみて回るとき、動物の足跡を追跡するときなど、バカが森を歩くときには常に蜂の羽音に耳をすまし、頻繁に樹上に目をやって、巣から出入りする蜜蜂の姿を探している。また、樹の根元の土を手にとって、そのなかに蜜蜂の死骸 (*libenji*) やその断片が混じっていないかどうか確かめる。

蜂の巣から蜂蜜を採集する場合、巣まで蔓がとどいていれば、それをつたってのぼっていく。適当な蔓がなければ、木そのものを切り倒す。採集した蜂蜜をいれる籠 (*pendi*)、体を支えるロープ (*yenda*)、煙で蜜蜂をいぶすための枝葉の束 (*yanji*)、採った蜂蜜を置く敷物 (*yalo*)、蜂蜜をキャンプへ持ち帰る包み (*ngili/mobabo/gba* 大きさによって呼称が異なる) など、斧 (*kopa*) 以外の道具はすべて周辺の植物からその場でつくられる。最近はプラスチック製のバケツなどが手に入るためあまり利用しないようだが、*Gilbertiodendron dewevrei* の樹皮を用いて蜂蜜を保存しておく容器 (*mokobe*) をつくることもある。

蜂蜜には、アフリカミツバチ (*tongia*; *Apis adansonii*) の蜜 (*poki*) と、すこし酸味のあるハリナシバチ亜科 (*Meliponinae*) の蜂 (*dandu*, *mopapele*, *molengi*, *pende*, etc.) の蜜（蜂の名前と同名）がある。ハリナシバチの蜜は最も大型のダンドゥ (*dandu*) 以外のものが採集されることは稀である。蜜の味は、蜜源の植物によって違っており、ネムノキ科のムバラカ (*mbalaka*; *Pentaclethra macrophylla*) の蜜は、もっとも甘く好まれる。トウダイグサ科のモンガンバ (*mongamba*; *Dichostemma glaucescens*) の蜜は、辛味があるためあまり好まれない。また、マメ科（ソラマメ亜科）のモバイ (*mobay*; *Pericopsis elata*) の蜜をあつめたダンドゥを食べると、酒に酔ったような感じになるという。バカは 2 つ以上の蜜が混ざっている場合でも、それぞれの蜜源が何であるかわかるという。

食用となる無脊椎動物では、アオギリ科のバド (*gbado*; *Triplochiton scleroxylon*)、サガリバナ科のボソ (*boso*; *Petersianthus macrocarpus*)、シナノキ科のングルマ (*nguluma*; *Duboscia macrocarpa*)、センダン科のボヨ (*boyoy*; *Entandrophragma cylindricum*)、カンガ (*kaanga*; *Entandrophragma candolei*)、トウダイグサ科のタク (*taku*; *Bridelia grandis*)、セング (*sengi*;

Uapaca spp.) などの樹木につく昆虫の幼虫 (*kopo*) を食べる。原則としてそれぞれの幼虫は樹木の名前と同じ名称 (たとえば *kopo gbado*) でよばれる。調査期間中に実際に観察したのは、バド、ボヨ、カンガの 3 種のみであった。このほかラフィアヤシ (*peke*; *Raphia* spp.) やアブラヤシの幹のなかにいる甲虫の幼虫 (*pose*, *kpokolo*) や、シロアリ (*bandi*)、アフリカマイマイ (*mbembe*) など、随時採集して食べる。

3.4 漁労

川の水量が減る乾季になると、村落周辺の小川や村の南方を流れるレベ川にそそぐ小川などで、女性たちが 2~3 日に 1 度、掻い出し漁 (*nguma*) をおこなう。2~3 人のグループにわかれて川をせき止め、バケツやクズウコン科の大きな葉を用いて水を掻い出す。まれに 10kg ちかいデンキナマズ (*gbigbi*; *Malapterurus electricus*) がとれることもあるが、獲物の大半は体長 5cm から 10cm 程度の魚 (*si*) やエビ (*kaanji*) である。

男性もレベ川やドゥマンゴイ川へ釣り (*njenje*) に行くことがあるが、罨猟や畑仕事の合間におこなう程度であり、あくまで補助的な生業である。ただ、森を長時間移動して夕方キャンプについたときなどに夕食用の肉がないことがあり、そのようなときは少年たちが釣りをする。数人でおこなえばすぐに 10 匹程度の小魚を釣ることができる。そのほか、ゾウやカワイノシシを倒したときに、その肉を食べることを禁止されている人たちは魚を釣って食べる。このように空腹時の食いつなぎの食物として魚は重要であり、Stearman [1991] は熱帯雨林における “keystone resource” としての魚の重要性を指摘している。

しかし興味深いことに、バカの男たちは釣針を数個ずつしかもっていない。その釣針も、川底に沈んでいる木の枝などに引っ掛けてしまうなどしてすぐに無くしてしまうのであるが、それにもかかわらず積極的に補充しようとはしない。森のキャンプで食物が欠乏したとき、成人男性がまずおこなうのは蜂蜜探しである。彼らの間には、小魚は女性や少年が獲ってくるものだという認識があるようである。

このほか、トケイソウ科のモンゴンボ (*mongombo*; *Millettia sanagana*) やカキノキ科のボロア (*mbolaa*; *Diospyros canaliculata*)、センダン科のアサマ (*asama*; *Turraeanthus africanus*) などの樹皮を叩きつぶして川に流して魚毒漁をおこなうという話も聞いたが、調査期間中には実施されなかった。

バカがおこなう漁労は小規模なものであるが、隣村のマレア・アンシアン村に住んでいる農耕民のコナベンベは、ベック川の河畔に集落をつくって網を用いて盛んに漁労をおこなっている。また彼らは、乾季になるとベック川をカヌーで 30km から 40km ほど下ったところにキャンプをつくり、精力的に漁労を営んでいる。

3.5 農耕

定住集落に滞在している間のバカの生業活動の中心は農業であり、毎日の食物としてもつ

とも多く利用されているのが、自ら栽培したプランテンをはじめとする農作物である。ズーラボット・アンシアン村のバカは、各世帯 1~2 筆の畑 (*gbie*) をもっている。畑では、主にプランテン (*ndo*; *Musa* spp.) を栽培しており、キャッサバ (*boma*; *Maniot esculenta*) を栽培している世帯は半数にすぎない。キャッサバの葉 (*jabuka*) も頻繁に食用にする。農耕民の畑でごく普通にみられるラッカセイ (*wono*; *Arachis hypogaea*) やトウモロコシ (*mbombo*; *Zea mays*), ココヤム (*langa*; *Xanthosoma sagittifolium*), サツマイモ (*mebuta*; *Ipomoea batatas*) を栽培している世帯は数戸あるが、いずれもきわめて小規模である。集落の周辺や畑にはトウガラシ (*alamba*; *Capsicum annuum*) が生えており、調味料として重宝される。かつてコナベンベが栽培していたというカカオ畑やコーヒー畑が集落周辺に点在しているが、現在では放置されたままである。

作物は簡単に料理（皮をむいてゆでる）して自家消費する。農耕民にみられるような、バトン・ド・マニオク (*timekuma*; キャッサバをつぶして棒状にして蒸したもの) やキャッサバ粉 (*bala*; 練り粥の材料), 酒 (*manio*) などの加工食品はまったくつくらない。

3.6 その他

以上に述べてきたような生活以外の現金獲得活動として、男性は獣肉を買う商人に依頼されて森のキャンプでの肉の買付けをおこなう。報酬は肉の量や距離に応じて変化するが、往復 1,000~2,000 Fcfa 程度である。女性はクズウコン科のンゴンゴ (*ngongo*; *Megaphrynium macrostachyum*) やビリ (*bili*; *Marantochloa* sp.) の茎皮を編んで、ブング (*bungu*) とよばれるごぎをつくり、それを 1 枚あたり 1,000 Fcfa で売っている。また農耕民や最近調査村に長期滞在するようになった商人から、畑作業の手伝いや建築作業を依頼されることもあり、その対価としては酒が振舞われるのがふつうである。しかし、ズーラボット・アンシアン村に常住する農耕民は 2 世帯しかおらず、そうした機会は限られている。

そのほかの現金収入源としては出稼ぎがある。出稼ぎの仕事は、カカオやコーヒー、ラッカセイの栽培・収穫の手伝いや、ヨカドゥマや伐採基地での家事や下働きなどの雑役である。期間はだいたい 3 ヶ月から半年程度である。調査村のほとんどの人が、ヨカドゥマやズーラボット・ヌボー村などで出稼ぎをした経験がある。このような出稼ぎには未婚の少年少女が従事することが多いが、夫婦で出稼ぎに出かけることもある。

4. 長期狩猟採集行（モロンゴ）

4.1 実施期間・場所と参加者

12 月に入ると雨が少なくなり乾季がおとずれる。2001 年の 12 月下旬から、バカたちは外部からきた銃の所有者に依頼されて、マカ（大型獣の狩猟）を 3 回おこなった。2 月上旬にそれが終わるとモロンゴに出ることになった。

2月13日に先遣隊が出発し、その日は村から南東に5kmくらいにあるレベ川の河畔にキャンプをつくった(図3)。そこに2泊したあと、ホンジ(Honji)川の畔にキャンプをつくり、そこで後続を待った。ホンジ川に滞在している間に、すべての参加者が集合した。これ以降、タバコを手に入れるために、2人の男性が6日間キャンプを離れたことが1度あったが、それ以外にはキャンプと定住集落との間にバカの行き来はなかった。ホンジ川畔で7泊したあと、1度に5kmくらいずつ移動しながら、野生ヤムのサファがたくさんあるというジャロフェ(Jalope)川の流域へ向かった。ジャロフェ川に長期滞在する予定であったようだが、そこからはサファの採集場所が遠いということで、1つ下流でベック川に注ぐモングング(Mongungu)川に移動した。もっともながく滞在したのはこのモングング川のキャンプで、合計43泊した。しかし、そこに到達するまでに8カ所でキャンプをおこない、合計24泊している。村に帰るときには2つのグループに分かれ、1つは図3に示した道を通り、もう1つはやってきたのと同じ道を通ったが、いずれも1週間以内で村に到着した。モロンゴの全期間は、73泊74日間であった。

ちなみに、村からまっすぐにモングング川に向かえば、女性でも3日目には着くことができる。なぜ多くの日数を道中で過ごしたのかは、今後モロンゴの社会的側面を考慮に入れて検討しなければならない問題であるが、ここではさしあたって、モロンゴには一応目的地とさ

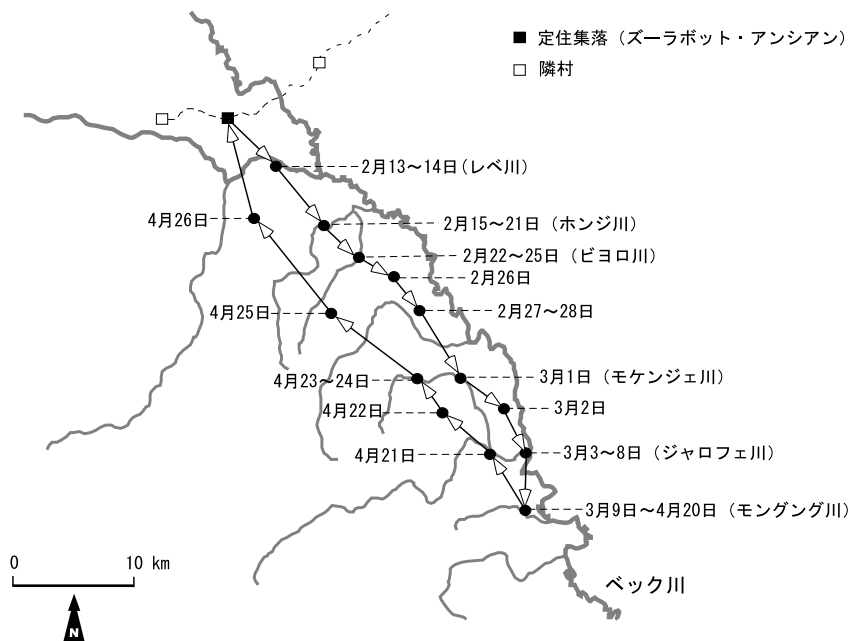


図3 モロンゴの宿泊地と滞在期間(2002年)

れる場所があるものの、蜂蜜や野生ヤムなど日々の食物を探しながら森で移動生活をおくることも、モロンゴの重要な側面であることを指摘しておく。

モロンゴが実施されたとき、ズーラボット・アンシアンには 29 世帯⁴⁾が滞在しており、そのうち 19 世帯、89 人がモロンゴに参加した。その内訳は既婚男性 17 人、既婚女性 22 人、12 歳以上の未婚者 14 人、2 歳から 12 歳の子供 27 人、乳児 9 人である。なおモロンゴ期間中に乳児が 1 人誕生したモロンゴに参加しなかった世帯のうち 8 世帯は、3 つのグループに分かれて、それぞれのはね罾猟キャンプに滞在していた。残りの 2 世帯は定住集落の近くに残って農作業に従事していた。

1 つの定住集落に暮らすバカの平均人数は 50 人程度であること [Sato 1992; Tsuru 1998]、また通常のはね罾猟キャンプの平均サイズが 2.4 世帯 10 人程度であることを考えると、このモロンゴのキャンプサイズ（89 人）はかなり大きいことがわかる。

4.2 モロンゴでの日々の活動と土地利用

キャンプを移動する日は、朝 8 時ころには荷物をまとめて出発する。道中では、蜂蜜や野生ヤムを探しながら、分散したり集合したりしながら進んでいく。だいたい昼すぎになると、キャンプ地を決める。女たちは、ドーム型の簡素な小屋 (*mongulu*) をつくりはじめ、男たちは獲物を探しに出かける。道中で蜂蜜を採集したり、獲物を追跡したりして、道をそれた男たちは、夕方遅くになってキャンプに到着することもある。

今回のモロンゴでは、モングング川に着くまでははね罾猟はおこなわなかった。そのかわりに、男たちは蜂蜜を熱心に採集していた。また、村外からやってきた銃の所有者からライフル銃を 1 つ委託されていたので、大型獣の足跡を発見すると 5~10 人の狩猟団を編成して狩猟に向かった。数人による小規模な集団的槍猟も頻繁におこなわれた。

モングング川に到着すると、はね罾猟をはじめた。親子や兄弟同士が一組になり、キャンプから放射状に全部で 7 つのはね罾ルートが設けられた（図 4）。それぞれのルートの長さは、キャンプから 2~4km くらいであった。罾が設置された範囲は、キャンプからほぼ直径 3km 以内の地域におさまっている。罾の見回りは 3 日に 1 回程度の割合でおこなっていた。ジャロフェ川とモングング川のキャンプでは、女たちが 2~3 日に 1 度、サファの採集にでかけていた。群生しているサファの採集は、いったんその場所をみつけると、森を探索するというよりも採集場に通うといった感がある。頻繁に採集された地域は図 4 に示しているように、キャンプから 2~3km 程度の地域にあった。以上から、モングング川のキャンプにおいて集中的

4) この世帯数は、2.1 で述べた 35 世帯（2003 年 8 月）より少ないが、これはモロンゴがおこなわれた 2002 年 2 月には、他村を長期間（2ヵ月~8 年）訪問ないし移住のために 5 世帯が不在であり、またモロンゴが終わった後 1 人の少年が結婚したためである。

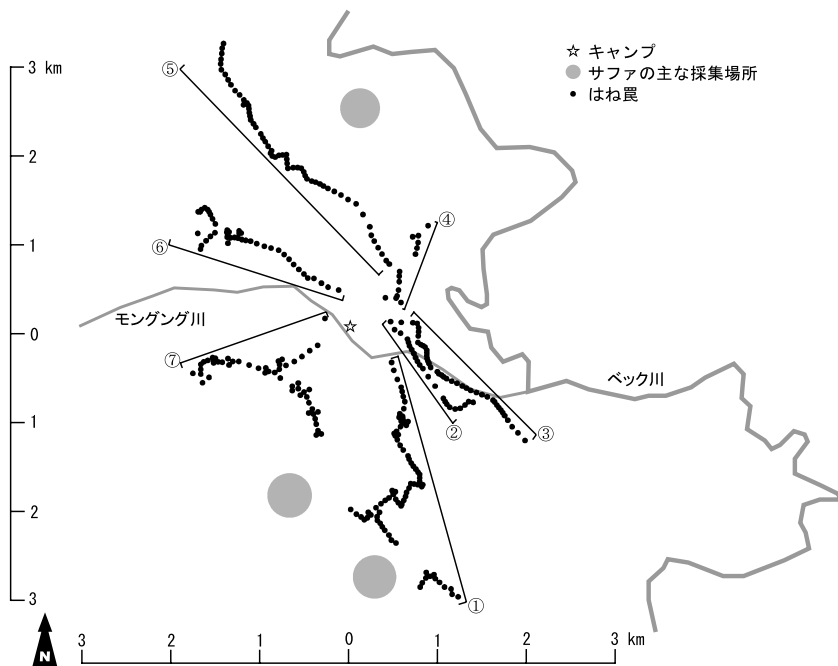


図 4 はね罾のルートとサファの主な採集場所（モングング川のキャンプ）

に利用された土地は $30\sim40\text{ km}^2$ ($6\text{ km}\times6\text{ km}$ 程度) であると考えてよいだろう。

モングング川に到着するまでは、数日に 1 度、キャンプを移動していたが、一方でモングング川のキャンプでは、集中的な土地利用がなされた。森のなかでの移動生活といっても、森を均一に利用するというわけではなく、エクステンシヴ (extensive) に利用する部分と、インテンシヴ (intensive) に利用する部分がある。このような土地利用のありかたは、森のなかの資源分布を反映していると考えられるが、これについては、後で検討する。

また、大規模なキャンプをつくるモロンゴであるが、ムブティやアカがおこなう網罾のようにたくさんの人間が参加する協同作業がおこなわれるわけではなく、個々人の日々の生業活動は、はね罾の見回りや、蜂蜜探しが大半を占めていた。つまり、モロンゴには大人数が参加するといっても、生業活動に関しては、ずっと小規模なサイズであるはね罾キャンプとたいして変わらない生活をおくっていたのである。

4.3 狩猟の成果

4.3.1 はね罾

モングング川のキャンプでは 43 泊したが、罾が仕掛けられはじめてから、すべて撤去されるまでの期間は 41 日間であった。この期間に、はね罾でとれた獲物は全期間をとおして捕獲された獲物のうち、捕獲頭数にして 81%、重量にして 64%を占めている。獲物の総重量

（体重）は 1,930kg で、ピーターズダイカーやセスジダイカーなどのレッドダイカー類があわせて 65 頭ともっとも多く、コシキダイカーの 9 頭がこれに続く。ほかにカワイノシシやブルーダイカーなどが数頭ずつ捕獲されている（表 2）。

モロンゴに参加した 17 人の既婚男性のうち、罠をかけるためのワイヤーをもってきていたのは 12 人で、ワイヤーをもってきていない者は 5 人いたが、彼らは親や兄弟の罠で捕らえられた獲物の分配を受けていた。はね罠はモングング川に到着した翌日から仕掛けはじめ、200 個に達したのは 6 日目、250 個に達したのは 12 日目で、その後は少しずつ増加して、最後に罠が仕掛けられた 26 日目にはちょうど 300 個に達した。ハンター 1 人あたりの罠数は 25 個であった。

この期間に獲物が減少傾向を示すかどうかを検討するために、はね罠を仕掛けはじめてから 1 週間ごとの捕獲頭数をみると、第 1 週目から順に 9, 16, 15, 16, 16, 18 頭であった。最初の 2 週間の間に 80% 以上の罠が仕掛けられたことを考えると、この期間には捕獲頭数の遞減はなかったといえよう。もちろん、このことがただちに持続的な捕獲量が保証されていることを示すものではないが、この地域の森では半径 3km の範囲には、すくなくとも 41 日間、おそらくはもっと長期間にわたって、100 人程度の集団に、安定して獣肉を供給できるだけの

表 2 モングング川のキャンプ（3月9日～4月20日）におけるはね罠による獲物の頭数と捕獲効率指数

和名	ラテン名	方名	捕獲頭数	平均体重 (kg)*	総重量 (kg)	捕獲効率 指数**
レッドダイカー類			65	15.9	1034.3	157
ピーターズダイカー	<i>Cephalophus callipygus</i>	ngendi	38	16.3	619.4	269
セスジダイカー	<i>C. dorsalis</i>	ngbomu	21	15.9	333.9	487
ハラジロダイカー	<i>C. leucogaster</i>	mongala/mie	5	13.6	68.0	2045
スグロダイカー	<i>C. nigrifrons</i>	monjumbe	1	13.0	13.0	—
コシキダイカー	<i>Cephalophus silvicultor</i>	bemba	9	35.8	322.2	1136
カワイノシシ	<i>Potamochoerus porcus</i>	pame	3	32.6	97.8	—
ナミチンパンジー	<i>Pan troglodytes</i>	seko	3	31.0	93.0	—
ボンゴ	<i>Tragelaphus euryceros</i>	mbongo	2	71.8	143.6	—
ミズマメジカ	<i>Hyemoschus aquaticus</i>	gekelakolo	2	12.1	24.2	—
アフリカゴールデンキャット	<i>Felis aurata</i>	ebie	2	7.2	14.4	—
ブルーダイカー	<i>Cephalophus monticola</i>	dengbe	2	3.7	7.4	—
アカスイギユウ	<i>Syncerus caffer</i>	mboko	1	141.7	141.7	—
オオセンザンコウ	<i>Smutsia gigantea</i>	kelepa	1	26.7	26.7	—
ヒョウ	<i>Panthera pardus</i>	sua	1	25.1	25.1	—
計			91		1930.4	112

* 各動物の平均体重はモロンゴでの捕獲獣の実測値。

** 捕獲効率指数は、罠が仕掛けられていたのべ日数（10,223）を捕獲頭数で割った値。1 つの罠において 1 頭の獲物がとれるのに平均して必要な日数を示す。捕獲効率の表示は 5 頭未満の動物については、煩雑になるのを避けるため省略した。

獲物が存在するといえる。

4.3.2 はね罨猟以外の猟法による捕獲量とモロンゴ期間中に獣肉から得られたカロリー

集団的槍猟や銃猟は、モロンゴの全期間をとおして随時おこなわれた。これらの猟法による獲物は、モロンゴ全期間のうち、捕獲頭数にして 19%，重さにして 36%であった。これらの猟法による捕獲頭数は 21 頭であるが（表 3），槍で倒した獲物が 11 頭とその半分を占め、そのなかではカワイノシシが 4 頭ともっとも多い。ただし重量をみると、委託されたライフル銃で倒した大型獣から得られた肉が相当な量（すべての捕獲量の 26%）に達している。

モロンゴの期間における消費人数（2.2 をみよ）は、最初の 1 週間程度は人数に変動があったが、その後は一定して 66.5 人であった。まず、モングング川におけるはね罨猟によって獲た獲物について、この数値を用いて 1 人 1 日あたりの捕獲量を計算すると、605g(可食部を 60%とすれば 363g) /人・日となる。さらに、モロンゴの全期間（74 日間）における、すべての猟法によって獲た獲物については、615g(可食部 369g) /人・日となる。モロン

表 3 モロンゴの期間中（2 月 13 日～4 月 27 日）におけるはね罨猟以外の猟法による捕獲

和 名	ラテン名	方名	捕獲頭数	総重量 (kg)	狩猟具
カワイノシシ	<i>Potamochoerus porcus</i>	<i>pame</i>	4	130	槍
アフリカニシキヘビ	<i>Python</i> sp.	<i>meke</i>	1	35	槍
コシキダイカー	<i>Cephalophus silivicultor</i>	<i>bemba</i>	1	28	槍
オオトカゲ	<i>Varanus</i> sp.	<i>bambe</i>	1	5	槍
バイパー	<i>Bitis</i> sp.	<i>boma</i>	1	3	槍
マングース	<i>Herpestidae</i> spp.	<i>nganda</i>	1	(1-5)*	槍
フサオヤマアラシ	<i>Atherurus africanus</i>	<i>mboke</i>	1	(1.5-4)	槍
コビトワニ	<i>Osteolaemus</i> sp.	<i>mokakele</i>	2	10	槍／山刀
ボンゴ	<i>Tragelaphus euryceros</i>	<i>mbongo</i>	1	97	散弾銃***
ホオジロマンガベ	<i>Lophocebus albigena</i>	<i>gada</i>	1	5	散弾銃
アフリカ（マルミ）ゾウ	<i>Loxodonta africana cyclotis</i>	<i>ya</i>	1	778**	ライフル銃****
リクガメ	<i>Kinxys</i> sp.	<i>kunda</i>	2	3	手
セスジダイカー	<i>Cephalophus dorsalis</i>	<i>ngbomu</i>	1	2	手
ミズガメ	<i>Pelusios</i> sp.	<i>lende</i>	1	2	手
センザンコウ	<i>Phataginus tricuspidis</i> or <i>Uromantis tetradactyla</i>	<i>kokolo</i>	1	1	手
ブルーダイカー	<i>Cephalophus monticola</i>	<i>dengbe</i>	1	1	手
			21	1099	

* 重量を計測できなかったため括弧内の数値は Kingdon[1997] から引用した。

** アフリカゾウの重量はバカが得た半身の重さ。当初、肉はすべてバカのものになるはずであったが、モロンゴの道中で漁労をおこなっていた農耕民がゾウ狩りの話を聞きつけて分け前を要求したため、彼らとバカとの間で分割した。農耕民は肉が手に入ると村に帰った。

*** 散弾銃はモロンゴのキャンプ近くに漁労をおこなっていた農耕民が持参しており、バカに狩猟を依頼した。

**** ライフル銃は町に住む銃の所有者が 6 発の弾丸とともにバカに委託していた。象牙は所有者のために保管しておく。

表 4 モロンゴにおける獣肉によるカロリー供給

	はね罾猟	すべての猟法
捕獲動物の重量 [kg]	1930	3029
消費日数*	48	74
のべ消費人数・日**	3192	4921
1 消費人数・日あたりの重量（および可食部） [g]	605 (363)	615 (369)
1 消費人数・日あたりのカロリー供給量 [kcal]***	544	553

* 消費日数は、はね罾猟に関する獲物については、モングング川のキャンプにおいてははね罾猟を開始した 3 月 11 日から定住集落に到着した 4 月 27 日までの 48 日とした。すべての猟法に関しては、全期間の 74 日間とした。

** 消費人数は 66.5 人。

*** カロリー供給量は、1 消費人数・日あたりの重量 (g) に可食部の割合 (0.6) をかけたのち、100g あたり 150kcal [Leung 1968] として算出した。

ゴの全期間において、獣肉から得たカロリーは、可食部 100g あたりに含まれるカロリーを 150kcal [Leung 1968] とすれば、553kcal/人・日となる（表 4）。

上述したように、ムブティは乾季になると頻繁に網猟をおこなう。森のハンティングキャンプでは、1 人 1 日あたりにすれば 580g [Ichikawa 1983]～680g [Hart and Hart 1986] の獣肉を得ることができる。この値はモロンゴにおける捕獲量の 1.5 倍以上になる。しかし、ムブティはその獣肉すべてを食べるわけではなく、農耕民との交換や商人との交易によって農作物を得るために半分ないしそれ以上の獣肉が使用されている [Hart 1978; Ichikawa 1983; 1991]。また、アカのハンティングキャンプでは、1 人 1 日あたり約 270g の獣肉を得ていたと報告されている [Kitanishi 1995: Appendix から算出]。つまり、仮にモロンゴをおこなっている間に銃を利用する機会がなかったとしても、ハンティングキャンプにおけるムブティやアカが消費する量と同程度の獣肉を得ることができたわけである。ただし、脂肪分の乏しい野生動物の肉をカロリー源として利用することは効率が悪いといわれている。実際に獣肉から得られたカロリーは基礎代謝の 3 分の 1 程度であり、主要なカロリー源として期待することはもろんできない。

4.3.3 はね罾猟キャンプにおける狩猟との比較

モロンゴにおける狩猟の特徴を検討するために、村の近くのキャンプでおこなわれたはね罾猟の場合と比較してみる。各罾が仕掛けられていた日数の合計を捕獲頭数で割ると、1 つの罾において 1 頭の獲物がとれるのに必要な平均日数を算出できる。この値が少ないほど、獲物が頻繁にとれることになる。⁵⁾ 本稿では、これを捕獲効率指数とよぶことにする。

5) たとえばこの値が 100（罾・日/頭数）であるとすれば、1 つの罾を 100 日間設置しておけば（あるいは 100 個の罾を 1 日設置しておけば）、1 頭の獲物がとれることになる。

モロンゴにおけるはね罾猟の捕獲効率指数は、112（罾・日／頭数）である（表 5）。それに対して、村から 20km 以内にある 6 カ所のはね罾猟キャンプにおける狩猟統計から算出した平均の捕獲効率指数は、122（罾・日／頭数）であり、両者にはほとんど差がみられない。モロンゴでは 14 種 91 頭、はね罾猟キャンプでは 24 種 691 頭の動物が捕獲されており、村の近くのキャンプのほうが若干捕獲動物の多様性が高いようであるが、これは観察日数の長さによるものと考えられる。その内訳をみると、両方ともレッドダイカー類がもっとも多く捕獲されており、モロンゴで 71%、村に近いはね罾猟キャンプで 74%を占めている。したがって、両者のあいだで主要な捕獲動物が異なったり、モロンゴのほうがより効率よく獲物を捕らえられたりするわけではない。

両者の相違点は、ハンター 1 人 1 日あたりの捕獲頭数にある。モロンゴでは 0.18 頭／人・日であるのに対し、はね罾猟キャンプでは 0.50 頭／人・日である。これは、はね罾猟キャンプにおけるハンター 1 人あたりの罾の数が 2.9 倍になっているためである。はね罾猟キャンプの獲物は、自給用を除いて残りを燻製にして村まで運び、商人に売る。2002 年の 4 月に調査村まで道路が開通して、肉の交易が盛んになるとともに、余剰の捕獲が増える傾向がさらに強くなった。反対に、遠方で狩猟を実施するモロンゴでは、肉を現金で販売したり、食料その他の物品と交換したりできない状況にあり、自給量を越える獣肉は必要ない。そのため、持参したワイヤーを使い切らなかった人がいたことからわかるように、結果的に自家消費以上の獲物を捕らないように捕獲量が抑えられていた。

このように、定住集落の近くでも十分な獲物が捕れるうえに、捕獲される動物の種類も変わらないことを考えれば、遠方までモロンゴに赴くことの目的は、より多くの獣肉を得るためであるということとはできない。このことは、モロンゴの食生活において、つぎに述べる野生ヤムが特色となっていることを示している。

4.4 採集の成果と食生活

モロンゴの期間中の食生活は、森で採集した食物だけに依存していた。この期間に、もっと

表 5 モロンゴとはね罾猟キャンプにおけるはね罾猟の捕獲効率の比較

	モロンゴ	はね罾猟キャンプ
捕獲頭数（うちレッドダイカー類）	91 (71%)	691 (74%)
のべ罾・日数	10223	84125
捕獲効率指数	112	122
キャンプにいるハンター数	12	2.7
ハンター1人あたりの罾数	25	72
ハンター1人1日あたりの捕獲頭数	0.18	0.50

はね罾猟キャンプは、定住集落から 20km 以内の距離に設けられた 6カ所について。

も多く採集された植物性食物は野生ヤムである。ジャロフェ川とモングング川のキャンプにいる間に、サファをはじめとして、エスマ、ケケ、バなどの野生ヤムが1人1日あたり1.64kgも採集され、このうちの85%がサファであった（表6）。ほかに副食としては数種のキノコ、イルヴィンギア属やパンダ科のカナなどの種子、蜂蜜などが採集された。なお、この期間に掻い出し漁はほとんどおこなわれなかったが、これは獣肉の供給が十分であったためかもしれない。数年前に別の地域でモロンゴをおこなったときには、掻い出し漁を盛んにおこなったということである。

モロンゴの期間の食事は、収穫物の構成から容易に推測できるように、野生ヤム（サファ）とレッドダイカー類の肉の組合せが一般的であり、とくに野生ヤムは、ほぼすべての食事で食べられていた。蜂蜜やキノコ、そして時折獲れる脂肪分の多いカワイノシシの肉などが、単調なメニューに彩を添えていた。

モングング川のキャンプにおいて、野生ヤムや蜂蜜などの採集物によって得られたカロリーは、合計1,786kcal/人・日になり（表6：Leung [1968] および Kitanishi [1995] を参照して算出した）、これに獣肉から得られたカロリーをあわせると、2,339kcal/人・日が摂取されたこととなる。バカの体重や、キャンプにおける労働量をみても、この値は十分なカロリー摂取

表6 モロンゴにおける野生植物などの収穫（3月5日～4月23日）

ラテン名など		方 名	総採集生重量 (kg)	1日1人あたりの生重量 (g)	1日1人あたりのカロリー供給 (kcal)*
野生ヤム類	<i>Dioscorea praehensilis</i>	sapa	4519.8	1359.3	1305.0
	<i>D. semperflorans</i>	esuma	654.6	196.9	189.0
	<i>D. mangelotiana</i>	ba	61.8	18.6	17.8
	<i>D. burkilliana</i>	keke	184.7	55.5	53.3
	<i>D. minutiflora</i>	kuku	22.7	6.8	6.5
	<i>Dioscoreophyllum cumminsii</i>	ngbi	3.1	0.9	0.9
野生植物の 果実・種子	<i>Panda oleosa</i>	kana	14.0	4.0	16.0
	<i>Irvingia excelsa</i>	gangendi (payo)	10.4	2.9	11.8
	<i>I. robur</i>	kombele (payo)	0.9	0.2	1.0
蜂蜜	アフリカミツバチ (<i>Apis adansonii</i>) の蜜	poki	146.1**	54.9	128.1
	ハリナシバチの蜜	dandu	62.4**	23.4	54.7
キノコ	—	tulu	15.7	4.4	1.4
イモムシ	—	kopo	0.6	0.2	0.1
魚	—	si	2.6	0.7	0.4
計					1786.1

* この期間の、のべ消費人数・日は 3335。カロリー供給量の算出には、Leung[1968] および Kitanishi [1995] を参照した（野生ヤムでは可食部を 0.8 として、120kcal/100g で算出した）。*Panda oleosa* の単位重量あたりのエネルギー量を示す資料がないため、*Irvingia excelsa* とおなじ 670kcal/100g として算出した。

** 蜂蜜の資料は 3月20日から4月21日。

量であると考えてよいだろう。全獲得カロリーのうち採集物が 76%, 野生ヤムが 67%, さらにサファが 56%を占めていることから, モロンゴの食生活はもっぱら野性ヤムを中心とした採集産物に依存していたといえる。

つぎに, モロンゴでの食生活を, 他の生活様式での食生活と比較してみる (表 7)。

はね罾猟キャンプでの食事では, 野生ヤムと購入した食料 (キャッサバ粉や米), そして蜂蜜が同程度の頻度で利用されており, 自ら栽培しているプランテンの割合が意外に少ない。はね罾猟キャンプで観察された野生ヤムは, バ, エスマ, ケケの順で多く, モロンゴの期間に重要な位置を占めていたサファは採集されなかった。

マカ (大型獣の狩猟) での食事では, キャッサバの練り粥と蜂蜜の頻度が高く, この 2 つが大半を占めている。獲物の探索を放棄して蜂蜜採集をはじめるとも, たびたびあった。マカのキャンプで消費されるキャッサバ粉は, 前述したように猟の依頼主が支給する。他の生活様式にくらべて魚の頻度が高くなっているのは, 肉がないときに小魚を釣って食べるからである。

定住集落では, プランテンがもっともよく食べられている。朝方, 焚き火を囲んで談笑しながらアブラヤシの果実を焙って食べる姿もしばしばみられた。また, 記録をとった時期には現れなかったが, ブッシュマンゴーの季節 (6~7 月) には, 乾燥させたフェケの胚乳を 20 入りのボウルを単位として, 同量のキャッサバ粉と頻繁に交換していた。乾季 (12~2 月) には搔

表 7 モロンゴにおけるカロリー供給量の割合, およびはね罾猟キャンプ・マカ・定住集落における食材の頻度と出現率

	モロンゴ* カロリー 供給 (%)	はね罾猟キャンプ		マカ		定住集落	
		出現率 (%)	出現回数	出現率 (%)	出現回数	出現率 (%)	出現回数
野生ヤム類	66	39	14	2	2	3	10
その他の野生植物/きのこ	1			4	4	3	8
プランテン		11	4			64	187
その他の栽培植物 (自家生産)				1	1	17	51
キャッサバ粉 (購入)		22	8	54	48	8	22
その他の購入した食料		17	6	2	2	4	11
アブラヤシ						8	24
蜂蜜	8	36	13	57	51	1	3
獣肉	25	50	18	40	36	24	69
魚	0			13	12	3	8
計**	100		36		89		293
調査をおこなった季節	3~4 月		7~8 月		3 月, 5 月, 7 月		8 月

* モロンゴについては, 総供給エネルギー量に占める百分率を示した (表 4, 表 6 に示した値)。

** モロンゴ以外の合計値は食事の観察回数である。すなわち, それぞれ品目の出現回数をたすと合計値を越える。

い出し漁がおこなわれ、魚やエビが食べられることも多い。

前述したように狩猟の成果に関しては、モロンゴと村に近い場所ではね毘猟キャンプでは、捕獲効率や獲物の構成にはほとんど違いがなかった。しかしモロンゴでの食生活において、野生ヤマの利用が突出していることは、他の生活様式ではみられない特徴である。これに加えて、食物のすべてを狩猟採集活動の産物から得ていることも、モロンゴが他の生活様式から明瞭に区別される点である。

4.5 過去のモロンゴ

ここ 10 年くらいの間に、参加世帯数が 10 世帯を超えるモロンゴは 4 回おこなわれている（表 8、図 5）。調査の前年には、11 世帯ほどでドゥマンゴイ川からロロボイ川の方面にいったという。このときには銃の所有者も同行し、マカ（大型獣の狩猟）が同時におこなわれた。また、3 年くらい前には、15 世帯程度が参加してドゥマンゴイ川のさらに上流へいった。このときには、ドゥマンゴイ川に注ぐ小川で、掻い出し漁を盛んにおこなったということである。そのほか、4 世帯が隣村のガトー・アンシアン村に住む人々と合流して、西方のジャー川に達する地域までモロンゴにいったという話も聞いた。

以上のものは比較的規模の大きなモロンゴであるが、このほかに 5～10 世帯が参加したモロンゴも幾度かおこなわれている。そのなかには、サファに依存しながら定住集落から 50km 近く離れた地域で移動生活をおくったという例もあれば、はね毘猟のキャンプとの違いが明確でない例もあった。表 8 には、10 世帯未満でおこなわれた小規模なモロンゴのうち、村から 30km 程度離れた地域まで達したという 6 つの事例を示している。

モロンゴには、大きくわけて 3 つのコースがある。まず、村から南西方向に向かうドゥマ

表 8 最近 10 年ほどの間に実施されたモロンゴ

主要キャンプがつくられた河川（支流）	村からの距離 (km)	経過年数	参加世帯数
①ドゥマンゴイ → ロロボイ	20-30	2	11+
②ドゥマンゴイ（モカ）	20	5－	15+
③ホンジ（ピヨロ）	15	5±	12+
④ホンジ → マンドゥレ	15-30	5±	6
⑤ホンジ → マンドゥレ	15-30	10－	7+
⑥ロロボイ → ジャー	30-50	10－	4+Ngatoの世帯多数
⑦ジャロフェ	45	10－	10+
⑧ジャロフェ → ポシエ	40-60	10±	8+
⑨ジャロフェ	40-45	10±	5+
⑩ジャロフェ（モケンジェ）	30-35	10±	6+

12 人への聞き取り調査より。①10 世帯を超えるキャンプ、②村から 30km 以上離れた 5 世帯を超えるキャンプ、のいずれかに該当するものを示した。モロンゴがおこなわれた時期は、当時の彼自身や彼の子供と、調査時に周囲にいる子供たちの年頃を比較しながら推定した。参加世帯数は、参加が確認された世帯数で、これよりも数世帯多い可能性がある。Ngato は隣村。

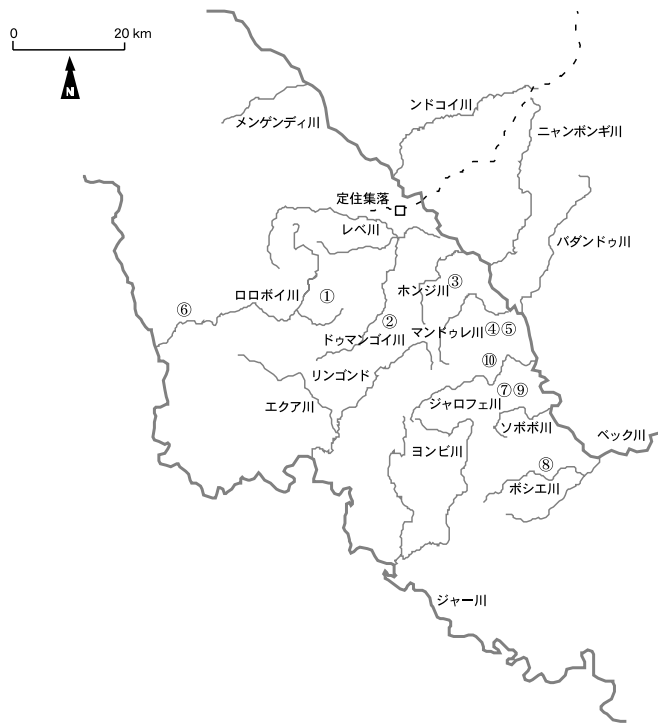


図 5 調査地周辺の河川と過去 10 年間にモロンゴをおこなった場所
(①～⑩は表 8 参照)

ンゴイ川からロロボイ川方面に向かうコース。つぎに、村の南方の比較的近い地域で、ホンジ川からマンドゥレ川流域を遊動するコース。そして、今回のモロンゴのように村の南東方向のジャロフェ川方面まで、かなり遠方にでかけるコースである。多数の人々が参加する大規模なモロンゴは、数年に 1 度の割合でおこなわれ、バカの生活における大きなイベントになっている。モロンゴは彼らの生活において例外的、あるいは特別な活動ではなく、バカの社会において、かなり一般的な生活様式であるといえることを指摘しておく。

つぎに、各世代の男女計 87 人にインタビューをおこない、婚姻などで他村から移住してきた 15 人と 10 歳以下の 15 人を除く 57 人について、これまでに経験したモロンゴの実施地域（60%ないし 80%以上の人々がモロンゴにいったことがあると答えた地域）を示し、さらにそれと比較するために調査期間中に設けられた 45カ所のはね罾猟キャンプが分布する地域を図 6 に示した。モロンゴが実施される地域は、はね罾猟キャンプが実施される地域とくらべてかなり遠方に及び、広範囲に及んでいることがわかる。図 6 から、モロンゴで利用される森の範囲を算出すると、40 代以上の人では 2,100km²(80%が経験)～3,400km²(60%が経験)、30 代の人では 900～1,200km² に及ぶことになる。なお、バカの初老の男性によれば、定住集落

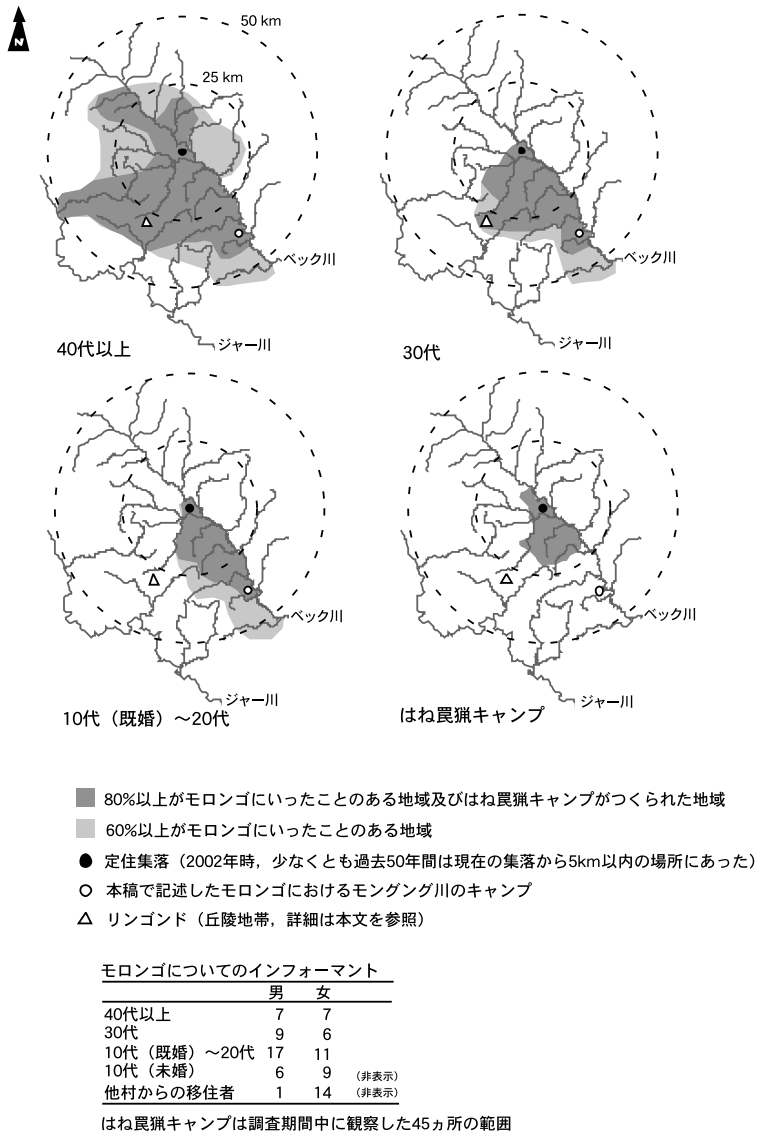


図6 世代別のモロンゴの経験地とはね罽獵キャンプの分布域

は移動したことがあるものの、現在の場所から 5km 以上離れた場所にあったことはないようである。

40 代以上の人々は、定住集落の北方や南西方向を含む広い範囲の森でモロンゴを経験している人が多い。集落の北方の森にモロンゴにいったときには、フェケの果実をたくさん採集したという話や、矢毒の原料となるキョウチクトウ科のネア (*nea*; *Strophanthus gratus*) の実を大

量に集めて村にもちかえり商人に売っていた、という話も聞いた。また、ある 50 代の男の話では、彼が若いころには 2 度の乾季 (*yaka*) を森のなかで過したこともあるという。つまり、1 年半ほどにわたって継続的に森のなかで生活したというのである。彼はベック川の対岸の地域や、ベック川沿いに下ってブンバ川まで達したこともあるという。そのころには、現在では定住集落でしかおこなわれない森の精霊ジェンギのパフォーマンスも、森のキャンプでおこなわれていたようである。

30 代では、集落の北方の森にいったことのある人の割合は減少する。しかし、彼らの多くは南西方向や南方の森にモロンゴにいったことがある。乾季がはじまった頃にモロンゴにでて、ブッシュマンゴーの季節 (*soko pekie*: 6~7 月) に村にもどってきたという話もよく聞いた。10~15 年くらい前には、ジャロフェ川からソボボ川を経てボシエ川まで達するほどの遠方までモロンゴをおこなったという。そのときには、トゥーマ (狩りの名人) であるバカの男が古い散弾銃をもっており、散弾銃から槍を発射させるサラとよばれる方法でゾウを倒して、たらふく肉を食べたということである。

30 歳以下の世代では、定住集落の南西方向の森でもモロンゴをおこなった経験があるという人の割合が減少している。しかし、この世代の人たちでも、今回のモロンゴがおこなわれた地域にはいったことがあるという人が多い。

バカによれば、今回のモロンゴの実施地域、すなわちジャロフェ川やモングング川からベック川が東に曲がるあたりには、とくにサファが多いという。また、村の南西約 30km に位置する、リンゴンド (*Lingondo*) とよばれる丘陵地帯にも、サファやエスマが多いという。これらの地域は、モロンゴの適地と考えられている。ただし、30 歳未満の世代には、リンゴンドにいったことがない人も多く、近年では、もっぱらジャロフェ川流域の森が頻繁に利用されている。このことは、WWF が国立公園設立のためにおこなった生態調査の結果からも示唆されている。すなわち WWF による調査がおこなわれた地域 (図 1 に示した国立公園の予定地とその周辺、定住集落の南方のモロンゴがおこなわれた地域のすべて含む) のなかで、ジャロフェ川の周辺では野生ヤムの採集跡など、人間活動の形跡の頻度がとくに高くなっている [WWF 1998: 25]。

5. 討 論

5.1 サファ採集の季節性と持続性

本稿では、乾季から雨季のはじめにあたる時期に 73 泊 74 日間にわたって、89 人の集団によってサファをはじめとする野生ヤムに主たるカロリー源を依存しながら狩猟採集生活が営まれたことが示された。この事例は、熱帯雨林における狩猟採集生活の可能性に関する議論において、どのような意味をもっているのだろうか。

Bailey ら [1989] は、この可能性に対する疑義を唱えた論文のなかで、アフリカのイトウリの森に住むムブティの事例 [Hart and Hart 1986] をとりあげている。Hart and Hart は、ほとんどの野生果実が消失する乾季から雨季のはじめにかけての 5 ヶ月間は、狩猟採集生活を維持するために必要なカロリー源食物が不足すると指摘している。しかし、本稿で示したバカと異なり、ムブティは野生ヤムをそれほど多く消費しておらず、カロリー源として頻繁に利用されている野生植物は主として雨季に収穫されるイルヴィンギア属や *Ricinodendron heudelottii* などの果実・種子である。

これに対して Bahuchet ら [1991] は、アカが住むコンゴ盆地北西部の半落葉性の森林には野生ヤムが豊富に生育しており、Hart らが狩猟採集の産物に依存した生活が困難とした乾季にも野生ヤムに依存して生活することが可能だと指摘した。このように、野生ヤムは乾季にデンプン貯蔵量が最大になり、その季節の重要な食料源となることが予想されていたにもかかわらず、野生ヤムに依存した乾季の狩猟採集生活の実態は知られていなかった。つまり、今回のモロンゴの事例は、これまで食物が不足するとされてきた乾季の間にサファを利用することによって狩猟採集生活が営まれている実態が明らかになったという点において、重要な意味をもっているのである。

つぎに、今回示したモロンゴの事例がどれだけ普遍性をもっているのかということについて、乾季における野生ヤムの入手可能性に注目しながら、さらに詳しく検証してみよう。

バカによれば、サファの塊根（イモ）は乾季（12～2 月）になると肥大し、雨が降りはじめると蔓が伸びて味が悪くなるという。今回、4 月末にモロンゴを切り上げて定住集落に帰ったのは、雨季がはじまったためサファの味が悪くなってきたからだということである。長期滞在したモングング川のキャンプ周辺のサファが採集しつくされたからではけっしてないのである。Dounias [2001] も、一年生の蔓をつけるというサファの生育サイクルの特徴から、養分を蓄えて塊根が肥大する 11 月から 3 月の間がサファの採集にもっとも適した時期であるとしているが、これはバカの説明とほぼ一致している。なお今回のモロンゴは 4 月末までつづき、その期間をとおしてサファが大量に食べられていたことから、4 月いっぱいまではサファの収穫が期待できると考えてよい。

それでは、サファの採集に適した半年間をとおして、この地域でサファの収穫が期待できるであろうか。バカの話では、ジャロフェ川やモングング川の流域、さらにベック川に沿って下っていった地域には、サファが群生している場所がたくさんあるということである。かつてモングング川よりも下流の地域で、モロンゴがおこなわれたことは先に述べたとおりである。また、調査期間にサファが採集された場所は、キャンプから 3 km 以内の範囲であることから、キャンプを 10 km ほど移動すれば別の採集場で同程度のサファを収穫できると考えてよいだろう。したがって、11 月ころからモロンゴがおこなわれ、仮にキャンプ周辺のサファが少な

くなったとしても、キャンプを少し移動することによって 11 月から 4 月の間、100 人内外の集団がサファに依存しながらモロンゴを継続することは可能であろう。

つぎに、このような集約的なサファの採集が経年的・持続的に可能であるかどうかということを検討してみたい。前述のように、バカによるサファの採集は「擬似栽培」[Dounias 1993; 2001] ともよべる形態であり、採集によってその個体が死んでしまうのを避けるように配慮されている。しかし、同じ個体から続けて収穫すると生産量は減少する [Dounias 2001]。したがって、同じ場所から持続的にサファの収穫を得るためには、数年間のインターバルをおく必要がある。これは、毎年同じ地域にはモロンゴに行かないというバカのモロンゴの実践と合致している。したがって、モロンゴを継続的にこなすには、サファが密生するモロンゴの適地が複数個所に存在する必要がある。

調査村には、今回のモロンゴに参加しなかったものも含めて約 140 人のバカが住んでいるが、彼らがモロンゴで利用する地域は広範囲に及び、1,000～3,000 km² 程度の森林から成っている（人口密度は、0.05～0.1 人/km² 程度となる）。今回のモロンゴには 89 人が参加し、集中的に利用された地域は 40 km² であったので、大雑把に 1 回のモロンゴで集中的に利用される地域は最大でも 80 km² であるとすれば、調査村のバカが利用している地域はその 12.5～37.5 倍になる。しかも、定住化・農耕化によって、人口が増加したと考えられるので、かつてはこれ以上に余裕があったであろう。このうち、どれだけの範囲でサファの収穫が期待できるかについては推測の域をでないが、過去のモロンゴについての聞き取り調査から示唆されているように、複数のモロンゴの適地が存在するのに十分な広さだと考えてよいだろう。これらの採集適地を数年間の間隔をあけて巡回的に利用することによって、乾季がおとずれるたびに継続的にモロンゴを実施することが可能であると考えられる。

ところで、上述したように、調査村のバカは数年間に 1 度の割合でモロンゴを実施している。一見すると、これはサファに依存した狩猟採集生活の限界を示しているようにもみえる。しかし筆者は、毎年モロンゴが実施されないのは、サファの収穫に限界があることによるものではなく、農耕をおこなっていることが原因であると考えている。モロンゴがおこなわれる乾季は森を伐開して畑をつくる時期である。したがって、定住化にともなって農耕が彼らの生活においてある程度重要な位置を占めるようになった現在、毎年のようにモロンゴを実施するわけにはいかないのである。とすれば、数年に 1 度ではあるが、畑をつくる作業を放棄してまでモロンゴを実施するということは、森の産物の豊饒さを示しているともいえるのではないだろうか。

5.2 雨季の食物供給と集団サイズの変化

調査地域の森では、乾季には豊富な野生ヤム資源を利用できることを示してきたが、雨季はどうであろうか。先に述べたように、雨季は多くの果実類の結実期に相当する。Hart and

Hart [1986] が調査をおこなったイトウリの森と同様に、調査地域でも、イルヴィンギア属や *Riciodendron heudelottii* の種子、*Anonidium manii* の果実、そしてイトウリの森にはない *Bailonella toxisperma* の果実・種子など、多種多様な植物が雨季に実りを迎える。蜂蜜や食用昆虫の多くも、この時期に大量に採集できるようになる。またこの季節には餌となる木の実が多いため、動物の肉も脂がのって美味になる。

そのほか、雨季の間にも利用できる野生ヤムが存在する。調査地から南方 100km ほどの地域で、雨季の 8～9 月におこなわれた調査によれば、林冠が発達している場所 (*manja*) での野生ヤムの分布密度は、5.8kg/ha（可食部）と見積もられている [Sato 2001]。ただし、その内訳は 73%がケケであり、サファは 8%にすぎない。これは、調査が実施された季節が、サファのデンプン貯蔵量が少なくなる時期である [Dounias 2001] ということに起因していると考えられる。しかしこの結果は、大量のサファの採集が期待できないこの季節においても、1,700ha（17km²）の森に、モロンゴと同程度の割合（1.64kg/人・日）で、100 人分の食物を 2ヵ月間供給するだけの野生ヤムが存在することになり、サファ以外の野生ヤムも食物の供給源として十分な量が存在していることを示唆している。⁶⁾

それでは、どうして大規模なキャンプをつくるモロンゴは、乾季におこなわれるのであろうか。サファに依存していたモロンゴでは 89 人もの集団が形成されたのに対して、はね罾猟キャンプの平均サイズは 2.4 世帯（10 人前後）であった。なぜこのような違いが生じるのであろうか。

熱帯雨林の野生ヤムに関する生理・生態学的な研究はあまり進んでいないが、大まかな傾向として、比較的光条件のよい場所に生育して一年生の蔓をつけるサファやエスマは群生しており、また塊根の採集適期の季節性が強い。他方、林冠が閉じた光条件の悪い場所にも生育して多年生の蔓をつけるバやケケは、分散して自生しており採集適期の季節性は弱いとされる [Dounias 2001]。

したがって、ケケを主なカロリー源として生活するならば、採集のたびに探索する必要がある。群生しているサファを採集する場合と比較して効率が悪い。さらに 1ヵ所に居住する集団サイズが大きくなると、採集効率はさらに悪くなるため、より遠方へ探索にでかけるか、キャンプの近くで採集をおこなうなら頻繁にキャンプを移動する必要がある。また雨季には、上述したように野生ヤムのほかにも種子・果実や蜂蜜など、さまざまなカロリー源となる食物が利用できるが、これらの食物資源の分布も、サファと比べるとはるかに分散している。つまり、食物資源の利用効率の点からみると、大量のサファを採集することが可能な乾季と異なり、雨

6) ただし、調査区域が小さいため（5.2ha）、この値をもっと広い地域（たとえば 1,000km²）に一般化できるかどうかについては、検討の余地が残っている。

季には小集団に分散して生活するほうが適応的であるといえる。

ムブティやアカは、乾季になると隣接集団と集合して 60～100 人程度の大規模な集団を形成し、集団的な網猟を盛んにおこなう [Ichikawa 1978; Bahuchet 1985]。しかし、バカが主な猟法として採用しているはね罾猟は、個人的または少人数によって実施される猟法であり、多人数の協力は不要である。それどころか、森のなかに分散して生息するダイカー類をはね罾猟によって捕獲するのに大人数が集合することは非効率的である。つまり効率的な猟法の追求のためには、モロンゴにおける集団の大きさはかえってマイナスに働く可能性がある。それにもかかわらず、モロンゴが大集団によって実施されるのは、乾季には食料源となるサファが大量かつ集中的に分布するからだと考えられる。実際に、バカにモロンゴにでかける目的を尋ねると、口をそろえて「サファを食べに行く」と答えるのである。ムブティやアカが大集団を形成するときには、狩猟が契機となっているのに対して、バカのモロンゴは、サファの採集が大きな要因になっているという点において特徴的であるといえるだろう。

これまでの野生ヤムをはじめとするカロリー源食物の入手可能性に関する考察をふまえて、バカの生活の変遷を再構成してみよう。バカの初老の男の話によれば、彼の祖父の時代には、たまたに農耕民の住む集落に出入りする程度で、バカたちは森のなかでの生活をおくっていたという。その当時、雨季の間はケケやバなどの野生ヤムや蜂蜜などの森のなかに散散的に分布している食物資源を効率的に採集するために、数家族単位で分散して生活していたと考えられる。そして大量のサファを採集することができる乾季になると、分散していた人々がサファの群生している地域に集まって、大きな集団を形成していたのである。そこでは精霊パフォーマンズがおこなわれたり、多数のハンターが集まることによって集団的な槍猟がおこなわれたりしたに違いない。

バカの定住化は 1950 年代から進められた [Joiris 1998]。さきのバカの男によれば、彼の両親の時代に村に家をつくって住むようになったという。村に住むようになると、農耕民との食物の交換や、みずから耕作することによって容易に農作物を手に入れることができるようになり、雨季の間は村の近くにはね罾猟キャンプをつくることによって、農作物と森の産物の両方を利用するようになった。一方、その頻度は数年に 1 度くらいであるが、現在でも乾季にはモロンゴがおこなわれている。逆説的であるが、本稿で記述したような村からサファのある地域へ大勢が一緒になって訪れるというモロンゴの形態は、定住化以降に実施されるようになったと考えられる。それ以前には、集中的・季節的な食物資源であるサファと散散的・通年的なその他の食物資源の入手可能性にしたがって、森のなかで離合集散していたのである。

5.3 罾猟の普及と獣肉供給の持続性

ここまで野生ヤムを主とするカロリー源となる食物に注目してきたが、カロリー源としては、獣肉はバカの食生活においてそれほど大きな位置を占めていなかった。だからといって、

彼らが肉に興味がないわけではもちろんない。バカ語では肉への渴望 (*pene*) は単なる空腹 (*pote*) とは別の語彙によって表現されるのである。これはアフリカ熱帯雨林に住んでいる人々が話すバントゥー系の言語においてよくみられることであるが、肉を食べることに対する関心の高さを示していると考えられる。もちろん 100 人内外の集団に対して数ヵ月間にわたってカロリーを供給することができるという意味において、サファはもっとも重要な食物資源であるといえるが、同時に十分な獣肉が得られるかどうかということも、モロンゴを実施するにあたって重要な条件の 1 つであると考えて間違いないだろう。そこでここでは、モロンゴのような大規模な集団に対して獣肉が持続的に供給されうるのかということを検討する。

モロンゴで獲られた 113 頭の獲物のうち、はね罟猟によって 91 頭を捕獲し、そのうち 71% がレッドダイカー類であった。このはね罟猟によるレッドダイカー類の捕獲が、バカの狩猟の特徴であるといえる。異なった猟法が採用される要因については、狩猟具の入手可能性や、女性の労働力の狩猟への配分などの観点からも検討する必要があるが、ここではまず、調査地域の自然条件とくに動物相と罟猟との間の適合性について考察したのち、モロンゴにおける獣肉供給の持続性を検証したい。

ムブティ [Tanno 1977; 市川 1982; Hart and Hart 1986] やアカ [竹内 1995; Kitanishi 1995] は罟猟を盛んにおこなっており、獲物の大半をそれらの猟法によって獲っている（ただし Kitanishi [1995] ではアカにおいても罟猟の比率が高いとしている）。Harako [1976] は、ムブティをダイカー・ハンターであると指摘しているが、アフリカ熱帯雨林に暮らすその他のピグミー系狩猟採集民や農耕民の集団においても、捕獲された獲物のうち罟猟では 83～100%、罟猟では 56～78% をブルーダイカーとレッドダイカー類が占めている（表 9）。しかしその内訳をみると、罟猟では 52～96% と圧倒的にブルーダイカーのほうが多く捕獲されているのに対して、はね罟猟ではレッドダイカー類のほうが多く捕獲されていることがわかる。また、レッドダイカー類以外の獲物についてみても、アカによるはね罟猟 [Kitanishi 1995] では、レッドダイカー類よりも大きなコシキダイカーが 7 頭 (19%)、カワイノシシが 5 頭 (14%) も獲られており、農耕民によるはね罟猟 [森 1994] では、レッドダイカー類よりやや小さめのミズマメジカが 16 頭 (13%) 獲られている。

これは、罟猟の場合には大きい動物ほど網を破って逃げやすいということ、また罟猟の場合にはある程度体重が重いほうが、ワイヤーが一気に強く締まるので逃げられにくいということと関係している。つまり、罟猟ではより小型 (10kg 以下) の動物が対象とされ、罟猟では中型 (10～30kg) の動物が主な対象とされているのである。実際に、Ichikawa [1983] における罟猟の獲物の平均体重は 6.3kg であるのに対し、モロンゴにおけるはね罟猟の獲物の平均体重は 21.2kg であった。

バカの初老の男性によれば、かつて調査地域に住む農耕民は罟猟をおこなっていたようであ

るし、一部のバカは網猟をおこなっていたという報告もある [Bahuchet 1993b]。しかしながら、先のバカの男性は網猟をみたことがなく、他のバカが網猟をおこなうという話を聞いたこともないという。かつて主に槍猟をおこなっていたバカは、現在でははね罾猟を主な猟法としているが、その過程において、網猟を知る機会があったにもかかわらず、少なくとも現在ではまったくおこなわれていないのである。ここでは、バカの間に網猟は受け入れられなかったにもかかわらず、はね罾猟は受け入れられた要因の 1 つとして、調査地域の動物相に注目してみよう。

調査地に隣接したブンバ・ベック国立公園の予定地でおこなわれた生態調査の結果 [WWF 1998] と、調査地から東に 150 km ほど離れたロベケ国立公園 [Fimbel *et al.* 2000]、ムブティが暮らしているイトウリの森 [Hart 2000]、アカが暮らしているザンガ・サンガ国立公園の周辺 [Noss 2000] におけるダイカー類の個体群密度と単位面積あたりのバイオマス（体重）を比較検討して表 10 に示した。まず、それぞれの地域におけるブルーダイカーとレッドダイカー類のバイオマスの合計を比較してみると、南部イトウリの値が少し劣るものの、ムブティやアカとバカが暮らしている地域の間に顕著な違いはみられない。つぎに、それぞれの地域における個体群密度を比較してみると、イトウリやザンガ・サンガでは、ブルーダイカーの個体群密度が 12~20 頭/km² に及んでいるのに対して、レッドダイカー類は 3~9 頭/km² 程度である。一方バカが暮らしているロベケとブンバ・ベックではブルーダイカーの個体群密度が 3 頭/km² 程度であるのに対して、レッドダイカー類は 5~15 頭/km² 程度である。このようにムブティおよびアカが暮らしている地域とバカが暮らしている地域では、ブルーダイカーとレッドダイカー類の個体群密度が逆転しており、後者ではレッドダイカー類が多い点特徴的である。

生息する動物のバイオマスに顕著な差がないとすれば、体重の重いレッドダイカー類のほうが多い地域では必然的に単位面積あたりの個体数が少なくなる。その結果、狩猟成果が獲物の密度に依存する網猟をおこなったときに、網の包囲網のなかに獲物がいない場合が増える（エンカウンター率が下がる）ことになる。これに対して、狩猟成果が罾の設置という設備投資量に依存するはね罾猟では、体重がある程度は重いほどよく罾にかかるし、レッドダイカー類程度の大きさならばワイヤーを切って逃げてしまうことはめったにないため、より大きなレッドダイカー類の生息数が多いほど効率的になる。したがって、イトウリやザンガ・サンガの森では、小型のブルーダイカーを対象とする網猟が適応的であるのに対して、ロベケやブンバ・ベック等のバカの住む地域では、より大きなレッドダイカー類を対象とするはね罾猟が適応的である。このように、槍猟からはね罾猟というバカの狩猟形態の変化には、バカが住むカメルーン東南部の動物相の特徴が関与していたと考えられる。

ところで、農耕民が手の込んだ多彩な罾をつくり、罾猟に強く依存しているのは、農耕のた

表9 ネットと罠による捕獲数におけるダイカー類の割合

	国	ブルーダイカー		レッドダイカー類		他のおもな獲物（頭数）*	すべての捕獲頭数	文 献
		捕獲頭数	%	捕獲頭数	%			
罠	ムブティ	コンゴ民主共和国	42	78	11	20	54	Harako 1976
	ムブティ	コンゴ民主共和国	66	52	39	31	126	Tanno 1977
	ムブティ	コンゴ民主共和国	98	69	25	18	142	Ichikawa 1983
	アカ	コンゴ	23	96	1	4	24	Kitanishi 1995
	アカ	コンゴ	112	69	46	28	162	竹内 1995
	アカ	中央アフリカ	440	75	64	11	589	Noss 2000
罠	アカ	コンゴ	4	10	18	46	39	Kitanishi 1995
	バカ	カメルーン（東部）	37	5	574	73	782	本稿
	農耕民	中央アフリカ	38	31	45	36	124	Noss 2000
	バイ（農耕民）	カメルーン（南部）	14	38	16	43	37	岩本 1990
	バイ（農耕民）	カメルーン（南部）	60	47	29	23	127	森 1994

*その他の獲物は10%を超えるものを示した

ブルーダイカー：*Cephalophus monticola*, レッドダイカー類：*Cephalophus callipygus*; *C. dorsalis*; *C. leucogaster*; *C. nigrifrons*

フサオヤマアラシ：*Atherurus africanus*, ミズマメジカ：*Hyemoschus aquaticus*, コシキダイカー：*Cephalophus silivicultor*, カワイノシシ：*Potamochoerus porcus*

表10 コンゴ盆地各地におけるブルーダイカーとレッドダイカー類の個体群密度および単位面積あたりの重量

調査地域	暮らしている ピグミー	ブルーダイカー		レッドダイカー類		両者の合計		文 献
		個体群密度 (No./km ²)	重 量 (kg/km ²)	個体群密度 (No./km ²)	重 量 (kg/km ²)	個体群密度 (No./km ²)	重 量 (kg/km ²)	
南部イトゥリ	コンゴ民主共和国	ムブティ	11.7	55.0	3.9	73.3	15.6	128.3 Hart 2000*
中央イトゥリ	コンゴ民主共和国	ムブティ	17.8	83.7	8.7	163.6	26.5	247.3 Hart 2000
ザンガ・サンガ	中央アフリカ	アカ	14.8-20.4	69.6-95.9	2.4-3.0	45.1-56.4	17.2-23.4	114.7-151.3 Noss 2000**
ロベケ	カメルーン	バカ	2.2-3.8	10.3-17.9	5.5-15.1	103.4-285.8	7.7-18.9	113.7-303.7 Fimbel <i>et al.</i> 2000***
ブンバ・ベック	カメルーン	バカ	0.4-2.3	1.9-10.8	5.3-10.0	99.6-188.0	5.7-12.3	101.5-198.8 WWF 1998****

* Hart[2000: 132] は、集落から離れた地域（10km 以上）の資料を示した。

** Noss[2000: 298] は、集落から 5-10km, 10-15km における資料を示した。

*** Fimbel *et al.*[2000: 365] は、集落から 10-20km, 20-30km, >30kmにおける資料を示した。

**** WWF[1998: 34-35] は、国立公園予定地である Boumba-Bek, Corridor forest, Nki forest についての資料を示した。比較を可能にするため、重量の算出にはブルーダイカー：4.7kg, レッドダイカー類：18.8kg [Koster and Hart 1988] を用いた。

めに移動が制限されることと、農耕のために多大な労働力を割かれることによるものとされている [Sato 1983; Takeda 1996]。また、アカは網猟のほかに罟猟も積極的におこなっている [竹内 1995] が、ムブティとくらべて農耕民との間の食物交換関係が希薄なアカの社会では、女性が主食となる食物の調達に時間と労力をさく必要があり、そのため男女両性の多数の参加を要する網猟に常時専念することが難しいからである。そのかわりに、男性のみでおこなうことができる罟として罟猟が各種用意されているとされているわけである [竹内 1995]。モロンゴは狩猟採集生活ではあるが、主食となる植物資源（サファ）が集中的に分布する場所はあたかも畑のようで、100 人程度の集団が 2 ヶ月にもわたって「定住的」な生活を営んでいた。このような「農耕生活」とも共通するようなモロンゴの特徴を考慮するならば、男性のみによって営まれるはね罟猟は、モロンゴの生活に適合しているといえるだろう。

このように、現在バカが実施しているはね罟猟は、生態環境およびモロンゴの生活スタイルに適しており、モロンゴにおける狩猟の成果をみてもわかるように、1 人 1 日あたり 605g（可食部は 363g）の獣肉を安定して得ることができる。しかし、調査地域にはね罟用のワイヤーが導入されたのは 20 世紀半ば頃であり、また調査地域のバカの間に広く普及するようになったのは、それよりも遅れると考えられるので、上記の収穫が長期間にわたって持続的であるのかということについては、検討してみる必要がある。

先ほど示した表 9 をみると、カメルーン南部の農耕民バイによる罟猟では、ブルーダイカーの捕獲頭数に占める割合が高くなっている。しかし、バイのハンターがかかると予測した獲物はレッドダイカー類が大半を占めており、⁷⁾ はね罟猟の主な対象はやはりレッドダイカー類であると考えられる。それにもかかわらず、獲物に占めるブルーダイカーの割合が高いのは、定常的な狩猟圧が高い地域では、動物相においてより小型で繁殖力強いブルーダイカー等が相対的に多くなるからだと考えられる。実際、農耕民バイによる罟猟の捕獲効率指数は 434（罟・日／頭数）であり [岩本 1990]、モロンゴにおける捕獲効率指数 112 とくらべると狩猟の効率がかなり悪くなっている。このように、過度な狩猟圧が長期間続くと、その地域の動物相に与える影響は大きくなり、獲物の構成も変化してくると考えられる。

モロンゴにおいては、はね罟猟によって 91 頭の獲物が捕獲されたのであるが、この捕獲量は持続的であるといえるだろうか。レッドダイカー類は生後 11 ヶ月目には性成熟して、その 7 ヶ月後（生後 18 ヶ月）には仔を生み、内的自然増加率 (r) は、0.29 と推定されている [Noss 2000]。また、調査地域のレッドダイカー類の個体群密度は 5.3~10.0 頭/ km^2 と推定されているので [WWF 1998: 34-35]、0.36~0.68 頭/ km^2 /年の捕獲ならば、持続的にレッドダイ

7) バイのハンターが仕掛けた 211 個のはね罟 1 つ 1 つにおいて、インフォーマント 2 人がそれぞれ予想した獲物は、レッドダイカー類が 105 頭と 124 頭なのに対して、ブルーダイカーは 30 頭と 38 頭であった [森 1994]。

カー類の狩猟が可能であるということになる。⁸⁾ モロンゴで集中的に利用された 40km² についてみると、この範囲には 200~400 頭のレッドダイカーが生息しており、年間 14.4~27.2 頭が持続可能な捕獲量の限界であるということになる。モロンゴで捕獲された 65 頭のレッドダイカー類は、キャンプ周辺に生息する個体群の 1/6~1/3 にあたることになり、これだけをみるとモロンゴは動物個体群動態に相当の影響を及ぼしていると考えられる。

しかし、2~3ヵ月程度でキャンプを移動し、その後何年も同じ場所を利用しない狩猟採集生活には、動物相が回復する「休猟期間」がある。定常的な狩猟圧と休猟期を挟んだ期間における狩猟圧が個体群に与える影響の違いについてはさらに検討の必要があるものの、おおよそそのところ、3~6 年程度の期間があれば、次に同じ場所を訪れたときには同程度の獲物を捕獲することができると考えられる。実際にモロンゴがおこなわれる地域が複数存在することを考えれば、再び同じ地域で狩猟をおこなうまでには、かなりの期間をおくことができる。したがって、今回のモロンゴのように自給用として狩猟がおこなわれているかぎりでは、はね罟猟によって安定して獲物を得ることができるといえるだろう。

6. 結 論

本稿では、定住化が進んでいるとされるバカの間でも、1 年のうちかなりの期間にわたって、大規模な集団による狩猟採集生活をおくっており、その事例としてモロンゴとよばれる長期狩猟採集生活の実態を記述した。

そのモロンゴにおいて、カロリー源となる食物は採集の産物のみに依存しており、その大部分がサファをはじめとする野生ヤムであることが明らかになった。この事例は、野生ヤムが豊富な地域では、果実・種子の不足する乾季の食物を野生ヤムによってまかなうことができることを示している。これは、熱帯雨林における狩猟採集生活の可能性に対する疑義の完全な反証ではないにしても、狩猟採集生活を可能にするだけの豊かな生態学的基盤が、少なくともカメルーン東南部の熱帯雨林に存在していることを示している。たしかに、Hart and Hart [1986] や Headland [1987] が指摘するように、多湿な常緑性の熱帯雨林には、狩猟採集生活の基盤となるのに十分なカロリー源食物（野生ヤム）が生育しない地域もあるだろう。しかし、アフリカで熱帯雨林として一括される森のなかには、アマゾンや東南アジアとくらべて降水量が少ないところが多い [門村 1992]。コンゴ盆地の外縁部の広大な地域に広がる年間降水量が 1,500mm 前後の半落葉性樹林は、そのような植生の代表的な例である。そして、このような比較的季节性が強い地域には、野生ヤムが豊富に分布しているとすれば、本稿で示されたカメ

8) 単位面積あたりの持続的な捕獲数は、内的自然増加率 (r) の自然対数を λ (ダイカー類の場合 1.34) として、年間生産量 (個体群密度 $\times \lambda$ - 個体群密度) に、個体群のうち人間に利用可能な割合 (寿命が 10 年程度のダイカー類の場合 0.2) をかけることによって、求められる [Robinson and Redford 1991]。

ルーン東南部の熱帯雨林における狩猟採集生活の可能性は、アフリカ熱帯雨林のかなり広い部分に適用できることになる。この点については、今後の調査に期待したい。

はね罾が多用されているというバカの狩猟活動の特徴に関しては、レッドダイカー類が多く生息しているというカメルーン東南部の生態環境と、「定住的」な狩猟採集生活であるモロンゴの生活形態に、はね罾が適していることから説明された。このはね罾は、20 世紀半ば頃からワイヤーが普及することによって、バカの間でも盛んにおこなわれるようになったと考えられるが、いまのところ持続的な狩猟が維持されている。

カロリー源となる野生ヤムの採集に関しては、大きな技術革新はこれまでなく、これからもおそらくと考えられる（カロリー源食物の代替という点についていえば、採集から農耕への移行ということになる）が、狩猟に関しては、はね罾に用いるワイヤーの急激な増加や銃の導入など、狩猟技術の量的あるいは質的な変化が容易に生じうる。実際に、2002 年 4 月の伐採道路の開通以降、調査地域では交易を目的としたはね罾が盛んになってきている。村へ獣肉をもちかえて売ることができるはね罾キャンプにおける獲物数は、モロンゴとくらべてハンター 1 人あたりにして 2.5 倍に及んでおり、狩猟活動が動物相に与える影響はこれまでに以上に大きくなっている。また、銃の導入によって、大型獣を倒すことが容易になり、大量の肉が供給されることになった。近年におけるこのような狩猟技術の変化は、バカの生活や居住集団の編成に大きな影響を及ぼしたと考えられる。この点については稿を改めて論じたい。

謝 辞

本研究で用いた資料は、文部科学省の 21 世紀 COE プログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」（課題番号 14219101）、および科学研究費・基盤研究（A2）「生活環境としてのアフリカ熱帯雨林に関する人類学的研究」（課題番号 12371004）によるものである。指導教授である市川光雄先生には、懇切丁寧な指導をしていただいた。また調査期間中およびその前後には、京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科の木村大治先生、服部志帆氏、四方かがり氏に格別の御配慮と御援助をいただいた。さらに調査地では、Ngalo=Daniel=Mayua 氏、Makaba=Roger=Mboko 氏をはじめとするバカの人たちに暖かく迎えていただき、森の生活全般にわたって懇切に教えていただいた。これらの方々に謝意を表したい。

引 用 文 献

- Bahuchet, S. 1985. *Les Pygmées Aka et la Forêt Centrafricaine*. Paris: SELAF.
- . 1993a. *La Rencontre des Agriculteurs: Les Pygmées Parmi les Peuples d'Afrique Central*. Paris: SELAF.
- . 1993b. *Dans la Forêt d'Afrique Centrale: Les Pygmées Aka et Baka*. Paris: SELAF.
- Bahuchet, S., McKey, D. and De Garine, I. 1991. Wild Yams Revisited: Is Independence from Agriculture Possible for Rain Forest Hunter-Gatherers?, *Human Ecology* 19 (2): 213-243.
- Bailey, R. C., Head, G., Jenike, M., Owen, B., Rechtman, R. and Zechenter, E. 1989. Hunting and Gathering in Tropical Forest: Is It Possible?, *American Anthropologist* 91 (1): 59-82.

- Bailey, R. C. and Headland, T. N. 1991. The Tropical Rain Forest: Is It a Productive Environment for Human Foragers?, *Human Ecology* 19 (2): 261-285.
- Bird-David, N. 1990. The Giving Environment: Another Perspective on the Economic System of Gatherer-Hunters, *Current Anthropology* 31 (2): 189-196.
- Brosius, J. P. 1991. Foraging in Tropical Forests: The Case of the Penan of Sarawak, East Malaysia (Borneo), *Human Ecology* 19 (2): 123-150.
- Cameroon, Orstom. 1966. *Dictionnaire des Villages de Boumba Ngoko*. Yaounde: Centre Orstom de Yaounde.
- Dounias, E. 1993. Perception and Use of Wild Yams by the Baka Hunter-Gatherers in South Cameroon. In Hladik, C. M., Hladik, A., Licares, O. F., Pagezy, H., Semple, A. and Hadley, M. eds., *Tropical Forests, People and Food: Biocultural Interactions and Applications to Development*. Paris: UNESCO, pp.621-632.
- . 2001. The Management of Wild Yam Tubers by the Baka Pygmies in Southern Cameroun, *African Study Monographs* suppl.26: 135-156.
- Dumont, R., Hamon, P. and Seignobos, C. 1994. *Les Ignames au Cameroun*. Montpellier: CIRAD.
- Dwyer, P. D. and Minnegal, M. 1991. Hunting in lowland, Tropical Rain Forest: Towards a Model of Non-Agricultural Subsistence, *Human Ecology* 19 (2): 187-212.
- Endicott, K. and Bellwood, P. 1991. The Possibility of Independent Foraging in the Rain Forest of Peninsular Malaysia, *Human Ecology* 19 (2): 151-185.
- Fimbel, C., Curran, B. and Usongo, L. 2000. Enhancing the Sustainability of Duiker Hunting Through Community Participation and Controlled Access in the Lobeke Region of Southeastern Cameroon. In Robinson, J. G., and Bennett, E. L. eds., *Hunting for Sustainability in Tropical Forest*. New York: Colombia University Press, pp.356-374.
- Hamon, P., Dumont, R. Zoundjhekpou, J., Tio Toure, B. and Hamon, S. 1995. *Les Ignames Sauvages d'Afrique de l'Ouest. Caracteristiques morphologiques*. Paris: ORSTOM.
- Harako, R. 1976. The Mbuti as Hunters: A Study of Ecological Anthropology of the Mbuti Pygmies (1), *Kyoto University African Studies* 10: 37-99.
- Hart, J. A. 1978. From Subsistence to Market: A Case Study of the Mbuti Net Hunters, *Human Ecology* 6(3): 325-353.
- . 2000. Impact and Sustainability of Indigenous Hunting in the Ituri Forest, Congo-Zaire: A Comparison of Unhunted and Hunted Duiker Population. In Robinson, J. G., and Bennett, E. L. eds., *Hunting for Sustainability in Tropical Forest*. New York: Colombia University Press, pp. 106-153.
- Hart, T. B. and Hart, J. A. 1986. The Ecological Basis of Hunter-Gatherer Subsistence in African Rain Forests: The Mbuti of Eastern Zaire, *Human Ecology* 14 (1): 29-55.
- Hart, T. B., Hart, J. A. and Murphy, P. 1989. Monodominant and Species-rich Forests of the Humid Tropics: Census for their Co-occurrence, *American Naturalist* 133: 613-633.
- 服部志帆. 2004. 「自然保護計画と狩猟採集民の生活—カメルーン東部州熱帯雨林におけるバカ・ピグミーの例から」『エコソフィア』13: 113-127.
- 林 耕次. 2000. 「カメルーン南東部バカ (Baka) の狩猟採集活動—その実態と今日的意義—」神戸学院大学人文学会編刊・年報『人間文化』14: 27-38.
- Headland, T. N. 1987. The Wild Yam Question: How Well Could Independent Hunter-Gatherers Live in a Tropical Rain Forest Ecosystem?, *Human Ecology* 15 (4): 463-491.
- . 1997. Revisionism in Ecological Anthropology, *Current Anthropology* 38 (4): 605-630.

- Hladik, A., Bahuchet, S., Ducatillion, C. and Hladik, C. M. 1984. Les Plantes a Tubercules de la Foret Dense d' Afrique Centrale, *Revue d'Ecologie (Terre et Vie)* 39: 249-290.
- Hladik, A. and Dounias, E. 1993. Wild Yams of the African Forest as Potential Food Resources. In Hladik, C. M., Hladik, A., Licares, O. F., Pagezy, H., Semple, A. and Hadley, M. eds., *Tropical Forests, People and Food: Biocultural Interactions and Applications to Development*. Paris: UNESCO, pp.163-176.
- Ichikawa, M. 1978. The Residential Group of the Mbuti Pygmies, *Senri Ethnological Studies* 1: 131-188.
- . 1983. An Examination of the Hunting-dependent Life of the Mbuti Pygmies, *African Study Monographs* 4: 55-76.
- . 1991. The Impact of Commoditisation on the Mbuti of Eastern Zaire. In Peterson, N. and Matsuyama, T. eds, *Cash, Commoditisation and Changing Foragers*, *Senri Ethnological Studies* 30: 135-162.
- 市川光雄. 1982.『森の狩猟民—ムブティ・ピグミーの生活』人文書院.
- . 2003.『『地域』環境問題としての熱帯雨林破壊—中央アフリカ・カメルーンの例から—』『アジア・アフリカ地域研究』2: 292-305.
- 岩本俊孝. 1990.「バイ族による森林性有蹄類の罾猟」河合雅雄編『人類以前の社会学』教育社, 51-70.
- Joiris, D. V. 1998. *La Chasse, La Chance, La Chant: Aspects du System Rituel des Baka du Cameroun*. Brussels: Universite Libre de Bruxelles.
- 門村 浩. 1992.「アフリカの熱帯雨林」環境庁熱帯雨林保護検討会編『熱帯雨林をまもる』日本放送出版協会, 49-90.
- Kingdon, J. 1997. *Field Guide to African Mammals*. Princeton: Princeton Univ. Press.
- Kitanishi, K. 1995. Seasonal Changes in the Subsistence Activities and Food Intake of the Aka Hunter-Gatherers in Northeastern Congo, *African Study Monographs* 16 (2): 73-118.
- . 2003. Cultivation by Baka Hunter-Gatherers in the Tropical Rain Forest of Central Africa, *African Study Monographs* Suppl.28: 143-157.
- Koster, S. H. and Hart, J. A. 1988. Methods of Estimating Ungulate Populations in Tropical Forests, *African Journal of Ecology* 26 (2): 117-127.
- Leclerc, C. 2001. *En Bordure de Route: Espace Social, Dynamisme et Relation a L'environnement chez les Pygmées Baka du Sud-Est Cameroun*. Paris: Universite de Paris X.
- Letouzey, R. 1985. *Notice de la Carte Phytogeographique du Cameroun au 1:500000*. Toulouse: Institut de la Recherche Agronomique (Herbier National).
- Leung, W. W. 1968. *Food Composition Table for Use in Africa*. Bethesda: FAO Nutrition Division; U.S. Department of Health Education, and Welfare, Public Health Service.
- Mercader, J., Runge, F., Vrydeghe, L., Doutrelepon, H., Ewango, C. E. N. and Juan-Tresseras, J. 2000. Phytoliths form Archaeological Sites in the Tropical Forest of Ituri, Democratic Republic of Congo, *Quaternary Research* 54: 102-112.
- 森 明雄. 1994.「カメルーン熱帯雨林における跳ね罾猟—マイクロ・ハビタットと罾技術に関する認知構造—」『アフリカ研究』45: 1-25.
- Noss, A. 2000. Cable Snares and Nets in the Central African Republic. In Robinson, J. G. and Bennett, E. L. eds., *Hunting for Sustainability in Tropical Forest*. New York: Colombia University Press, pp.282-304.
- Robinson, J. G. and Redford, K. H. 1991. Sustainable Harvest of Neotropical Forest Mammals. In Robinson, J. G. and Redford, K. H. eds., *Neotropical Wildlife Use and Conservation*. Chicago: University of Chicago Press, pp.415-429.
- Sato, H. 1983. Hunting of the Boyela, Slash-and-Burn Agriculturalists, in the Central Zaire Forest, *African*

- Study Monographs* 4: 1-54.
- . 1992. Notes on the Distribution and Settlement Pattern of Hunter-Gatherers in Northeastern Congo, *African Study Monographs* 13 (4): 203-216.
- . 2001. The Potential of Edible Wild Yams and Yam-like Plants as a Staple Food Resource in the African Tropical Rain Forest, *African Study Monographs* Suppl.26: 123-134.
- 佐藤弘明. 1991. 「定住化した狩猟採集民バカ・ピグミー」 田中二郎・掛谷誠編『ヒトの自然誌』平凡社, 543-566.
- Sommer, A. 1976. Attempt at an Assessment of the World's Tropical Forests, *Unasylva* 28 (112/113): 5-25.
- Stearman, A. M. 1991. Making a Living in the Tropical Forest: Yuqui Foragers in the Bolivian Amazon, *Human Ecology* 19 (2): 245-260.
- Takeda, J. 1996. The Ngandu as Hunters in the Zaire River Basin, *African Study Monographs* Suppl.23: 1-61
- 竹内 潔. 1995. 「アフリカ熱帯雨林のサブシステンス・ハンティングーコンゴ北東部の狩猟採集民アカの狩猟技術と狩猟活動」『動物考古学』4: 27-52.
- Tanno, T. 1977. The Mbuti Net-hunters in the Ituri Forest, Eastern Zaire: Their hunting activities and band composition, *Kyoto University African Studies* 10: 101-135.
- 寺嶋秀明. 1997. 『共生の森』熱帯林の世界 6. 東京大学出版会.
- Tsuru, D. 1998. Diversity of Ritual Spirit Performances among the Baka Pygmies in Southeastern Cameroon, *African Study Monographs* Suppl.25: 47-84.
- Turnbull, C. 1965. *Wayward Servants: The Two World of the African Pygmies*. New York: the American Museum of Natural History.
- WWF. 1998. *Large Mammals and Vegetation Surveys in the Boumba-Bek and Nki Project Area*. Yaounde: WWF Cameroon.